

大特集 世代を超えるつながりを育む同窓会支部 p.02
小特集 ICU教職員住宅の研究と、その存在意義 p.06
スペシャルインタビュー PEプログラム 山内宏志先生 p.10
スペシャルインタビュー 武術世界大会出場 池内理紗さん p.12
Think globally, act locally. 藤谷健さん p.15
A People 宮智 泉さん p.16
お邪魔します！あのメジャー 言語学 李 勝勲 上級准教授 p.17
From the University p.18
桜祭りのお知らせ p.22

ALUMNI NEWS

INTERNATIONAL
CHRISTIAN UNIVERSITY
ICU ALUMNI
ASSOCIATION
3-10-2, Osawa
Mitaka-shi, Tokyo 181-8585
TEL&FAX: 0422-33-3320
<https://www.icualumni.com/>
E-mail: aooffice@icualumni.com
ALUMNI NEWS
VOL.140 MAR.2024





1962年の餅つき

大特集

世代を超える つながりを育む 同窓会支部

同窓会支部と聞いたら何を思い浮かべますか？
海外や地方でその地域に住む同窓生の集まり、
所属していたサークルや寮の仲間、会社や業種を通じて
知り合った同期や先輩後輩……。新型コロナがようやく落ち着き、
ここ数年足踏みを余儀なくされていた支部の活動が
徐々に再開し始めている。共通するのは、
世代を超えたつながりを大切にしたいとの思いだ。（文中敬称略）

文：新村敏雄（本誌） 写真：第二男子寮OB会、山本瑛、テニス同好会PAPOOSE支部提供

〈第二男子寮OB会支部〉

2023年1月21日。寒いながらも上々の天気のもと、楓寮とカナダハウスの現役寮生が企画した餅つきが、楓寮で開かれた。新型コロナの感染が広がり、3年ぶりの開催。参加者の大半は寮生だが、学生ではない人も10人ほどいた。杵の持ち方、いきなりつかずにまず臼の中で米を押しつぶすというコツの伝授など、甲斐がいく世話を焼く。彼らの「正体」は、老朽化に伴う建て替えで2015年に惜しまれながら閉寮となった、第二男子寮出身者を母体とする支部（第二男子寮OB会支部）のメンバーだ。

1950-60年代に建てられた学生寮（男子寮3、女子寮4）で現存するのは、カナダハウス、第3女子寮、第4女子寮の3棟。2010年以降に建てられた寮の名称は樺、銀杏、櫻（以上が新寮）、樅、楓（新々寮）で、「第二男子寮」

という名前も建物とともに消え、いまは命名権の取得により楓寮の1階ラウンジが「第二男子寮の間」として残るのみだ。なぜ第二男子寮OB会支部が餅つきのサポートに？

餅つきは寮の文化

第二男子寮OB会支部の発足（最初の総会は2010年7月開催）は、寮の取り壊しをめぐる動きから始まった。第二男子寮は、老朽化に伴いほかの第一男子寮、第一／第二女子寮とともに大学側から2011年に解体したいと提案された。老朽化による閉寮は仕方がないものの、古い寮が4年間いられるのに対して新寮では2年間しかいられないという規則の改定など、学生を「管理する」イメージが提示されたことがOBの中に違和感を生じさせた。「学生の自治のもと、4年間共同生活を送るという、それまで脈々と受け継がれてきた寮の『文化』が断絶されるのでは、と思いました」（支部初代会

長の佐柳信男、37 ID93）。佐柳はほかの卒寮者とともに、閉寮見直しが個人レベルの感情論ではなくOBの総意と受け取ってもらえるよう、支部という形を作ることを決め、公開質問状を提出するなどの活動を進めた。その後、大学側も執行部の交代とともに「まず解体ありき」ではなくなり、閉寮は当初計画より4年遅れて2015年に実施された。

餅つきはその第二男子寮で長く受け継がれてきた行事のひとつで、毎年、成人の日に行われていた。夜も明けない午前3時ごろから中庭で火を焚きもち米を蒸し始め、20歳になる（なった）寮の1、2年生が記念式典に行く前につきあげる、新成人を祝うイベントだったという。寮OBや他の寮生も遊びに来るのが恒例だった。餅つきを通して上下の世代がゆるやかにつながる場でもあった。

第二男子寮OB会支部では、閉寮後も寮生とのつながりを維持し、寮の文

化を次の世代に伝えようと、新々寮のセミナールームでワークショップを開いたり、アルバイトを募集したり、色々と模索してきた。しかし近年の学生はなかなか忙しいこともあり、こうした努力はすぐには確固としたパイプにまではならなかったという。

餅つきについても、新寮で自ら準備して現役生にも呼びかけて出前のような形で実施してきたが、折からのコロナ禍で2020年1月を最後にこの伝統は一時途絶えていた。そうしたメンバーの気持ちを知ってか知らずか、餅つき自体にあまり魅力を感じない、という現役生の声もあったという。

初めて現役生が動いてくれた！

2022年の暮れ、吉祥寺。2022年から支部の代表に就任した安藤公秀（26 ID82）は、そうした状況を念頭に、樺島栄一郎（37 ID93）ほか支部理事たちと共に現役の寮生と懇親会を開いた。その席で餅つきの話を聞いた



左上・かつての第二男子寮／左下・「本気の餅つき」を多くの寮生や卒業生が楽しんだ／中上・「かわら版」最新号は51号／右上・学生名簿
右中・犬狼会リユニオン、大学食堂に100人超が集った／右下・文集「犬狼」



寮生が「自分たちでも餅つきをやってみたい」と発案してくれたのが、すべての始まりだった。

幹事役に手をあげた現役生2人はID24。コロナ感染が始まったばかりの2020年に入学した学年だ。寮にはおろか、大学構内にも入れず、授業は2年間オンラインという過酷な学生生活を過ごした。寮の文化というものがあることすら体験できなかった。安藤たちが語る餅つきの話に心が躍ったであろうことは想像に難くない。驚くのはそこからの彼らの行動力だ。

懇親会からわずか1か月という短期間で、企画書を仕上げて大学の了解を取りつけ、まだコロナ感染が続いているなかで対策を検討し、就職活動もしながら機材のレンタルなどを手配する、怒涛の準備が進められ、冒頭の本番にこぎつけた。

第二男子寮OB会支部では2011年12月から「犬狼会かわら版」という会報を発行している。2023年4月発行の第50号は、1月の餅つきの特集。発起人となった現役生2人が、寄稿している。

「82卒と24卒、42年の差。IDがここまで離れていても、つながり続けていることに感謝と幸せを感じました。(中略) 今回のような世代を超えたイベントにより、偉大なるICU卒業生の姿を目の当たりにし、自分も先輩方のような卒業生(ICU生)になりたいと

心より尊敬するとともにICU生で良かったと思えた瞬間でした。(中略) 今後もコロナによって失われた寮文化や寮の活気を取り戻し、寮に住んでいてよかったと思える体験を増やしたいと思います」(成嶋萌さん、楓寮)

「餅つきを終えた感想は、一言で『やってよかった』です。(中略) コロナ禍でまともに寮同士の交流や大学生活で華やかな思い出を作ることができていなかった学生に、こういった場を提供できたことは一つのやりがいとなりました。(中略) 第二男子寮が残した寮の思い出や文化は多少なりとも現在に受け継がれています。またICUの寮に思いを馳せることがあれば、いつでも遊びに来てください」(平野連太郎さん、カナダハウス)

命名権寄付金で学生支援

現役の寮生をサポートしたいという第二男子寮OB会支部の活動は、23年1月の餅つき以前から、餅つき以外でも行われている。楓寮の1階ラウンジ「第二男子寮の間」は、第二男子寮OB会支部で寄付を募り、約418万円を拠出して命名権を獲得したものだが、この寄付金が学生の活動を支援する原資となっている。

2022年4月には、新入寮生歓迎のCandleFlameという学生企画に命名権寄付金から8万円を支援した。この資金で買ったLEDキャンドルは、教

会のキャンドル礼拝やサークルのライブイベントなどに貸し出しているそうだ。

餅つき直前の2022年12月6日には、カナダハウスを中心にした寮生実行委員会主催の運動会が開催されたが、こちらにも優勝者へのカップやハチマキ200人分購入の資金を支援している。

そして2023年5月13日、「大犬狼会」という第二男子寮として初のリユニオンが開催された。OB、OG、現役生およそ100人を超える参加者を集めたイベントのハイライトのひとつが「寮コミュニティ支援金獲得コンペ」。コンペで優勝した現役生の企画に対して、同じく命名権寄付金から支援金を出すものだ。

1回目の優勝者はカナダハウス・第三女子寮連合の『「創作合唱コンクール」を開きたい!』という企画。各寮で創作した歌を合唱し、青春を表現するダンスや楽器、動画などのプラスアルファもOKという内容で、5万円が贈呈された。([聖ソキリーナ合唱コンクール]と名付けられたこのイベントは、2023年12月17日の開催に向けて準備が進められたが、インフルエンザの大流行で延期されました)

試行錯誤の中から現役寮生との接点を見出した第二男子寮OB会支部。「人生の局面で物事の優先順位は人それぞれ。支部活動への関与スタンスにも、世代などの違いによる温度差はあ

る。それでも、支部の形をとることで、自然発生の集まりよりは上から下まで幅広くつながることができている」と安藤はみている。支部の理事会メンバーのひとり、今村道博(28 ID84)は「犬狼会のまとまりをつなぎとめてきたのは、『かわら版』があったことがとても大きいと思います」と会報の存在が支部活動のカギであったと評価する。その「かわら版」をほぼ一人で編集、発行してきた棟居暁(32 ID88)は「餅つきでなんとなくつながっていたのが空中分解しなくてよかった」と振り返る。

「次は何をしようか!」。仕事で多忙な合間を縫って、支部メンバーはアイデアをめぐらせている。

支部名は犬狼会

第二男子寮OB会支部は自らを「犬狼会」と名乗る。当時の寮はいずれも愛称として星の名前がつけられていた。第二男子寮は「シリウス」。シリウスは太陽に次いで明るい1等星で、和名が「犬星」、中国では「天狼星」と呼ばれる。寮の旗は「天狼」と書かれているが、第二男子寮で初期のころから作っていた文集の名称が「犬狼」だった。



支部設立総会には新旧世代が広く集った



コロナで中断していた夏合宿を再開（2023年）

〈テニス同好会 PAPOOSE支部〉

テニス同好会PAPOOSE（パプース）支部は2018年に支部登録した。運動部のテニス部は大学の創立の年に発足したのに対して、テニス同好会の設立は1973年（名称がパプースになったのは1978年ごろ）で、2023年に創立50周年を迎えた。2018年4月に現在の屋根付きテニスコートが完成してからは、週3回、月曜と水曜の夜、土曜の昼に練習をしている。

「papoose」とは、「アメリカ先住民族の子供」という意味の英語。設立のころ、名称を公募したところ寄せら

れた案のひとつで、当時の会員の間にヘアバンドが流行しており、その姿からの連想という。支部申請をした理由は、50年近く続いている歴史へのリスペクトのほか、過去にあったような「危機」の時に応援してもらえることへの期待だ。支部長の鴛淵泰三（23 ID79）は三代目の会長をつとめたが、今でもコーチとして現役学生と練習を共にしている。

テニスが若者ファッションのようにみられた1970-80年代にはパプースへの加入も増え続け、1980年代前半ごろには会員数は100人ほどまで膨れ上がった。しかし、ここ10年ほどは活動が停滞したこともあった。

テニス同好会は長い間パプースだけだったが、ハードな練習のテニス部と、大会などには出ず楽しくやる同好会の中間の位置付けを標榜する新しいテニスサークル「Footloose」ができて、そちらに学生が流れた。

同じころから、詳細ははっきりしないが、ICUの学生のサークル活動全般が停滞していったことも影響したという。5年前ぐらいには、会員は20人ほどまで減少。練習は鴛淵と学生が1、2人しか来ず、廃部がちらついたこともあった。また体育施設の工事が始まってコートが使えなかった期間（1年半）は、利用料を払ってテニス部のコートを借り、練習を続けた。

そして2020年からのコロナ・パンデミック。2021年度の会長は、会長になる前の1年間大阪の自宅で学生生活を送った。学生ではない鴛淵もキャンパスの敷地には入れない状態が続いた。コートに再び立てたのは2021年からだ。

コロナも落ち着いた2023年は加入者も回復。数年ぶりに軽井沢で夏合宿を開催し、OBも差し入れ持参で参加した。また、会員にD館東棟修繕グループ募金への参加を呼びかけ、寄付をした団体のひとつとして顕彰版に支部の名前を残せることになった。

グローバル・サウスの盟主インドにも同窓会支部

2023年に中国を抜いて世界一の人口となったインド。2023年の主要20か国・地域（G20）の議長国を務め、アジアやアフリカなどの新興国・途上国による「グローバル・サウス」のけん引役としても注目が高まっている。そのインドに、2023年暮れ、19番目の海外支部が誕生した。

2022年4月からインドのデリーNCR（National Capital Region）に駐在している平川武通さん（35 ID91）は、23年春、ゴルフ場で偶然ICU卒業生（野津賢成さん、40 ID96）と出

会った。また、平川さんのセクションメイトが出張でデリーに来た時に「ウチの会社のデリー支局駐在の人もICUだよ」と聞き、「意外にいるのかも」と調べてみたら、デリーに7人は在住と判明した。

まずは一度集まろう、となり、10月に市内のイタリアンレストランに5人が集合。自己紹介や近況報告などをしていたら、あっという間に3時間ほどが過ぎたという。「D館に関係した方が多かったですね。運動部系は私（ラグビー部）と野津さん（水球部）

だけでした」。

せっかくなら支部を設立しよう、と話が進み、同窓会インド支部設立に向けて、「インドバカ山会」を立ち上げ、その報告を同窓会ウェブサイトにも送り、さらにデリーで発行されている日本語の月刊フリーペーパー「chalo」を通じて呼びかけてみた。

「chalo」は創刊2011年。インド各地約30カ所無料で配布されている。「インドバカ山会」が呼びかけを掲載してもらった「サークル情報」というコーナーには、大学では早慶上智、明治、立教、中央、法政、一橋、神戸などの名前がある。これを見て連絡してきた卒業生もあり、12月には支部設立要件の「10人」を超える11人となり、月末に開いた忘年会で支部申請をすることが決まった。メンバーにはインドで紅茶の店を営みインド在住16年となる石井博子さん（GE2002）も加わった。

平川さんは神戸製鋼所の子会社で建設機械を製造・販売するコベルコ建機のインド代表。インドで生産した製品をインド国内で販売するほか、バングラデシュやネパール、中東などにも輸出している。

実は平川さんは同窓会のラグビーOBOG会支部の役員を務めたこともある。担当はOBチームのアドバイザーや、卒業部員の名簿の管理など。「名簿の管理は以前からの課題でかな

り大変ですが、フェイスブックなどのSNSも活用しながらがんばっています」という。

外務省のデータによるとインドにはおよそ8000人ほど在留邦人がいる。その半分以上がデリーや近郊のグルガオン（グルグラム）、ノイダなどに住んでいるという。ほかには、デリーから空路で2時間半ほど離れた南部のチェンナイ、バンガロール（ベンガルール）や、東部のコルカタ、西部のムンバイにも一定数の日本人がいるので、まだICU卒業生はいる可能性がある。ちなみにインドの日本人社会は自動車メーカー、スズキの関係者が多数を占めているようだ。子会社であるマルチ・スズキ・インドが生産する乗用車は、インド市場ではトップの4割を占める。

デリーには日本人会もあるが、子供が日本人学校に通う家庭以外では、加入率はそれほど高くないようだ。平川さん自身も、会員に企業経営者などが多いインド商工会には入っているが、日本人会にはまだ入っていない。同窓会支部が設立できれば、ビジネス以外の情報のネットワークができるのでは、との期待がある。「今回所在がわかった卒業生には、卒業から10年前後の若い方たちもいますが、ICU卒業とわかるとそれだけで距離感が縮まり、年齢に関係なくフランクな話ができます」と語る。



支部申請を決めた12月の忘年会

高かった10人の壁 モスクワ同窓会

アラムナイニュース vol.124で紹介した「モスクワ支部設立へ始動」。残念ながら、支部は誕生しなかった。

同年7月に同窓生5人による食事会を呼びかけ、支部設立準備のまとめ役を買って出た末次崇さん (34 ID90) によると、当時在留邦人 (駐在員の家族も含む) は1700人ほどいたモスクワだが、日本から来る駐在員は概ね3年程度で交代していくので、「10人」という要件は「越せそうでなかなか越せない」壁だった。

ある程度まとまった日本人が駐在している海外の大都市では、なにかしら日本人コミュニティの連絡や情報交換の場が形成されているものだが、モスクワではそれがなく (日本語フリーペーパー「モスクワ・ナビ」は2017年7月に休刊)、「新しく着任される方にICU出身者の存在を知っていただくのもなかなか難しいところでした」という。言葉の問題もあったようだ。モスクワではロシア語専攻がある上智大学や

東京外国語大学出身者が二大勢力で、上智出身者の同窓会「モスクワ・ソフィア会」は「帰任されたOBを含めるとメンバーが100人を超える」と言われ、そうした交流チャンネルがないと、同窓生に出会う機会も限られてしまう。

末次さんによるとモスクワの日本人のビジネスパーソンは「この2年弱で100人を割り込み、そのうち常駐している方は30人ほど」だそうだ。2020年からのコロナ禍、そして2022年2月末に始まったロシアのウクライナ侵攻の影響は大きく、2023年12月時点でロシア関連のICU出身者は末次さんのほか常駐・出張ベースの往来の方にモスクワで起業しているおひとりを加えても、5人に満たないとのこと。勤務先のJCBは2022年3月14日以降ロシアにおけるJCBカードの決済サービスを停止し、拠点の人員態勢も段階的に縮小しつつ、今にいたっておられるが、末次さんもまもなく帰任することになるだろうとのことだ。

支部活動を支える同窓会組織部

支部を作るきっかけと目的はさまざま。地域支部 (国内、海外) であれば、その地域周辺に住む同窓生が集まれる場として、部・サークル・寮・趣味であれば、「青春時代」に時間を共有した仲間と親睦を深めたり、大学で同じ領域をとともに学んだ友人や仕事に関連した仲間との交流の場として、支部が作られてきた。

2024年1月時点で58を数える同窓会支部の活動をサポートするのが、同窓会の組織部。支部の活動をリードするというより、必要に応じて議論の場を設けるなど、支部が活動しやすくなる環境を整えるのが役目だ。

組織部からみた支部活動の意義やメリットは、①同窓会ウェブサイトへの活動告知や報告が掲載される、②人や情報のハブになる (特に地域支部はより幅広い情報を受け取りやすい)、③オンライン会議システム (zoom アカウント) の利用——などがある。②では、就職や転職の相談をしたり、支部の中で自分の活動を紹介したり、というケースも報告されている。

組織部の運営方法は、この数年でいくつも見直しが行われた。コロナ前は年1回対面で開催してきた支部長会は、検討の末、2020年に廃止した。支部長会参加のために支給してきた交通費の決め方・使われ方に不公平感があったことが背景で、廃止したリアル開催の支部長会のかわりとして、新たにオンラインでの支部と組織部合同の全体会をスタートさせた。

同じく2020年、1支部に年5000円程度の支部支援金も廃止した。そもその額が小さいこと、必ずしもすべての支部が利用していないこと、海外支部には時間がかかる手続きを経てでなければ送金できなかったことが理由だ。

また同年より、コロナでオンラインでのコミュニケーションが当たり前になったことから、組織部及び支部で活用できるオンライン会議システム (zoom) のアカウントを取得し、支部内の打ち合わせ・活動でも利用できるようにしている。

「支部の活動をリードするのではない」組織部だが、組織部と支部で検討を重ねて2020年10月からスタートした「ICUOnlineAlumniHouse」は、卒業生が毎回異なるテーマについてオンラインで話し、そのテーマに興味のある卒業生・在学生在が誰でも参加できる、バーチャル支部のようなものだ。これまでに19回開催してきた。

支部の存在は、必ずしも同窓生の間で広く知られているわけではないようだ。設立時期がわかっているもので、5年以上経過しているものが21、10年以上は10あるにもかかわらず、だ。

設立後の新規加入者があまり増えないことも認知度に影響している支部もあるとみられる。

組織部では、支部が、設立の本来の趣旨である「大学と同窓会の発展に向けた活動を継続的にこなって」いけるよう、知恵をしばってサポートしていく構えだ。

国内支部 (12)	連絡先アドレス
北海道	hokkaido-chapter@icualumni.com
東北	tohoku-chapter@icualumni.com
北陸	hokuriku-chapter@icualumni.com
とちぎ	tochigi-chapter@icualumni.com
東海	tokai-chapter@icualumni.com
関西	kansai-chapter@icualumni.com
徳島	tokushima-chapter@icualumni.com
香川	kagawa-chapter@icualumni.com
広島	hiroshima-chapter@icualumni.com
九州・山口	kyushu-chapter@icualumni.com
沖縄	okinawa-chapter@icualumni.com
三鷹	mitaka-chapter@icualumni.com
海外支部 (19)	
ニューヨーク	ny-chapter@icualumni.com
ワシントンDC	washingtondc-chapter@icualumni.com
シカゴ	chicago-chapter@icualumni.com
北カリフォルニア	northerncalifornia-chapter@icualumni.com
南カリフォルニア	southerncalifornia-chapter@icualumni.com
ボストン	boston-chapter@icualumni.com
ハワイ	hawaii-chapter@icualumni.com
UK	uk-chapter@icualumni.com
デンマーク	denmark-chapter@icualumni.com
パリ	paris-chapter@icualumni.com
ドイツ・スイス	germany-swiss-chapter@icualumni.com
上海	shanghai-chapter@icualumni.com
香港	hk-chapter@icualumni.com
台湾	taiwan-chapter@icualumni.com
タイ	thailand-chapter@icualumni.com
インドネシア	indonesia-chapter@icualumni.com
シンガポール	singapore-chapter@icualumni.com
フィリピン (現在休止中)	philippines-chapter@icualumni.com
インド	india-chapter@icualumni.com
部・サークル・寮など (13)	
国際基督教大学理学学倶楽部	scienceclub-chapter@icualumni.com
野球部OBOG会	baseball-chapter@icualumni.com
ラグビー OBOG会	rugby-chapter@icualumni.com
山楽会	sangaku-kai-chapter@icualumni.com
第二男子寮OB会	2md-chapter@icualumni.com
サッカー部	soccer-chapter@icualumni.com
美術部OB会	bijutsubu-chapter@icualumni.com
The Weekly GIANTS	wg-chapter@icualumni.com
玄徳会 (空手道部OB / OG会)	karate-chapter@icualumni.com
テニス部OBOG会	tennis-chapter@icualumni.com
フライングディスク	flyingdisc-chapter@icualumni.com
テニス同好会PAPOOSE	papoose-chapter@icualumni.com
カナダハウス	canadahouse-chapter@icualumni.com
興味・関心 (14)	
Shining60's	shining60s-chapter@icualumni.com
ICU医療関係者の会	iryokankei-chapter@icualumni.com
LA会	los-angeles-kai-chapter@icualumni.com
J.P.Morgan	j.p.morgan-chapter@icualumni.com
丸の内Style	marunouchistyle-chapter@icualumni.com
ICU女子会	icujoshikai-chapter@icualumni.com
ICU教育セミナー	kyouiku-seminar-chapter@icualumni.com
ICUICUの会	icuicu-chapter@icualumni.com
Peace Bell Scholar	peacebell-chapter@icualumni.com
Financial ICU	financial-chapter@icualumni.com
基督教伝道献身者の会	icudendokenshinsha-chapter@icualumni.com
ICU Brothers and Sisters (IBS)	ibs-chapter@icualumni.com
ICUリテラシー研究会OBOG会	liteken-chapter@icualumni.com
ICUスポーツ関係者の会	icu-sports-chapter@icualumni.com



一柳米来留ことウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計した住宅（岸佑さん提供）

小特集

ICU教職員住宅の研究と、その存在意義

お花見、読書会、クリスマス、ゼミ発表会……。ICUでの学生生活では先生のご自宅に伺う機会が多々ある。大学Webサイトでも謳っているように、ICUではキャンパス全てが教育の場だ。ここでは、そうした学生生活の背景でもある教員住宅の歴史と今を訪ねて、その存在意義を考えたい。

文：川島美菜（本誌） 写真：各人提供（明記以外、川島美菜）

ヴォーリズ設計の住宅の内装（岸佑さん提供）



ICUの教職員住宅は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）の設計、アントニン・レーモンド（1888-1980）の設計、そしてヴォーリズ建築を参考にした日本の建築会社による設計のいずれかである。（本稿では「教職員住宅」の呼称を使用する。）

ヴォーリズとレーモンドは、ともに20世紀初頭に日本で活躍した著名なモダニズム建築家だ。どちらも日本のキリスト教系教育施設の建築物にもその手腕を発揮した。彼らの建築物の特徴は、住宅の機能性の高さに加え、日本文化への理解とモダニズムの融合、そしてその土地の自然環境や気候に適した造りになっているところだ。実用

的でありながら美的にも優れており、かつ、宗教的機能を備えている。

築50年以上の歴史

教職員住宅については、大学から、2019年7月17日付の公開資料「ICUの施設整備の現状と展望」で次のような見解が示されている。「ICUの学内住宅は、教員の住居としてのみならず、教員と学生の対話の場として、重要な役割を担ってきた。また、建築としての歴史的価値が高いヴォーリズ、レーモンド設計の住宅もある。しかし、築50年以上経ち経年劣化が激しくなっているものも多く、建て替えを検討する時期にある。〔中略〕既存住宅は可



上から／アントニン・レーモンドが設計した住宅／庭／キッチン
(全て岸佑さん提供)

能な限り補修・修繕を行い、学内住宅の拡充は法規制上の制約が少ない共同住宅の建設で対応する方針である。」

この教職員住宅の内、ヴォーリスとレーモンド設計の住宅に関して、2018年頃からキャンパスでは「ICU教職員住宅研究会」が調査・研究等の活動をしている。その研究会のメンバーである岸佑さん(47 ID03/G2005・2008/アジア文化研究所)と大和田卓さん(ICUHS卒・日建設計)にお話をうかがった。

ICU教職員住宅研究会の取り組み

研究会のメンバーは東京理科大学伊藤裕久先生や東京農業大学粟野隆先生をはじめ、ICU高校の高柳昌久先生も関わっている。ICUの31のメジャーにはない“建築”の専門家もいる。アジア文化研究所は、2016年10月29日にディッフェンドルファー記念館東棟オーディトリウムで開催されたシンポジウム『ヴォーリスの夢：平和と大学』を主催した実績もある。

研究会の活動の調査や作業には先生たちだけではなく理科大やICUの学生



左から／研究会の計測調査の様子(岸佑さん提供)／教職員住宅の庭に現れるタヌキ(高橋伸元客員准教授提供、2015年8月撮影)／泰山荘の滝石組整備作業の様子(大和田卓さん提供)

も参加している。

ICUキャンパスは、複数の建築物が一敷地内に集合しているヴォーリズの建築物「群」として貴重な価値がある。レーモンド住宅については、レーモンドが設計した現存する民家として貴重な建築だ。ICUの教職員住宅は生活史からも教育史からも重要な歴史資料だ。教室以外の生徒の居場所、生徒と先生が密接に関わることができる場を念頭に置いて設計されており、特にヴォーリズ設計の住宅は住みやすく、愛着が湧きやすいと言われている。

研究会では、教職員住宅の建築的な調査や、生活者への聞き取り、歴史的価値の検証などの研究結果について、シンポジウムを開催して発表している。シンポジウムは過去2021年2月と2023年6月の2回開催された。第1回の様子は本誌135号「学内住宅の記録と記憶をめぐって～シンポジウム開催報告～」でも報告された。第1回シンポジウムの活動を取りまとめた冊子は、ICU図書館のアーカイブズにも保存されている。

住宅の様子は写真や設計図だけではわからないことも多く、実際にフィールドワークが欠かせない。教職員住宅

の実測調査から始まった研究活動は、今は、泰山荘が中心的なテーマだ。例えば、ICUの教職員住宅群は泰山荘を基準にして配置が考えられている。建物同士の距離などからヴォーリズが建物群として何を意図して住宅エリアをデザインしたのかを調査している。他にも「泰山荘庭園・滝石組見える化プロジェクト」として泰山荘の庭の滝石組を調査したうえで修復作業を行なっている。

ICU教職員住宅研究会では、今後は研究内容を取りまとめ、日本建築学会で発表することも計画している。

ヴォーリズの建築物群やレーモンド住宅の今後について考えるにあたり、「住宅の保存は建物だけの問題ではない。周囲の環境との相互関係が必ずあり、ICUの教職員住宅は住宅も古くなっているのと一緒にICUの木や森も古くなっている。そうすると住宅と森をどう管理するかという問題になる。人が増えて研究会の活動は豊かになったが、調査地自体は老いてきている状態」との話が印象的だった。

周回道路の外側は森林が深い。そこが木造住宅にとって過酷な環境であることは想像に難くない。実際にナラ枯

れや倒落木、竹林の侵食の影響を受けている住宅もある。また、居住していた先生から、住宅の庭にモグラやアナグマが穴を掘っていた事や、夜中に軒下でアナグマが活動する声を寝室から聞いた話も伝わっている。

ICUの教職員住宅はこれまでも歴史や文化財の視点から議論をされてきた。今後、多種多様な専門性が一つの場所に集まるICUだからこそ、より多彩な視点からの教職員住宅研究に期待したい。

研究会では卒業生向けのイベントも開催予定である。興味関心を持っている方はぜひ参加を検討してはいかがだろうか。

(本記事の執筆にあたり、ご協力いただいた皆様、大和田様、岸様、佐野様、鈴木様には心より感謝申し上げます。)

(参考資料) 榊島榮一郎『ある土地の物語 中島知久平・ヴォーリズ・レーモンドが見た幻』(北樹出版、2019年)、高澤紀恵・山崎綱介『建築家ヴォーリズの「夢」 戦後民主主義・大学・キャンパス』(勉誠出版、2019年)



私たちは、「はたらくをよくなる®」会社です。

PEACEMIND



ピースマインド株式会社
代表取締役社長・
共同創業者
荻原 英人 (ID00)

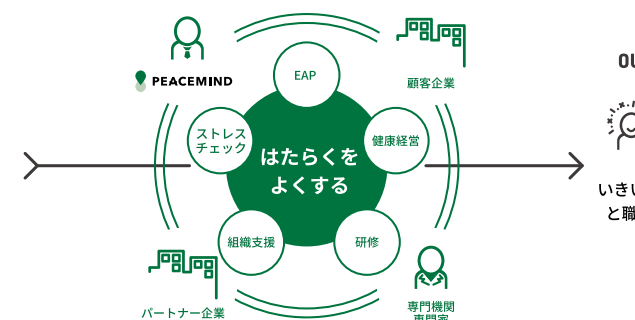
ピースマインドは「はたらく人が抱える『不』を解決し、心豊かな未来を創る」をミッションに「はたらくをよくなる」ソリューションを提供している企業です。

職場のメンタルヘルス・健康経営の推進、ハラスメント対策等の人と組織に関する課題をお持ちの経営者、人事の皆様からのご相談をお受けしています。

国内外のグローバル企業の成長支援と一緒にチャレンジしてくれる仲間も募集しています。

SOCIAL
ISSUES

はたらく人と
職場の
多様な課題



OUTCOME

いきいきとした人
と職場を増やす



「はたらくをよくなる」
職場づくりをサポート！
専門家監修のお役立ち記事です。
ぜひご覧ください。

エンプロイヤーサクセス部
人事グループ長
小島 真理 (ID87)



EAP 従業員支援プログラム

産業医業務受託サービス

ストレスチェック

健康経営支援

研修

クライシス支援

休職・復職者支援

ハラスメント対策支援

ウェルネスプログラム

WHY
PEACEMIND

サービス開始から
25年

お取引企業
1400社/年

外資系顧客構成比
35%



03-3541-8660

ピースマインド株式会社



ホームページ▶



ICU教職員住宅での“暮らし”

レーモンド住宅に長年お住まいだった鈴木寛名誉教授（数学メジャー）と、
現在ヴォーリズ住宅にお住まいの佐野好則教授（文学メジャー、30 ID86）正子さん（28 ID84）ご夫妻にお話をうかがった。

鈴木寛先生インタビュー

—— 教職員住宅には何年間お住まいでしたか？

ICUには1993年に勤め始め、1996年8月から2019年3月に退職する3ヶ月前の2018年12月まで約22年間住んでいました。住んでいたレーモンド設計の2階建て住宅には、自分たちの前は川島重成先生がお住まいでした。

—— 住宅での思い出を教えてください。

一般的な日本の家とは異なる造りの家だったとは思っています。広いリビングルームが用意されていたり、トイレが動線を分けて3つあったり、家族が暮らしながらも多くの学生を招くことができる構造になっていました。自分たちの物というよりはICUの財産として学内の教職員住宅に住んでいたという意識でした。

学生を住宅に招く機会は、C-weekのオープンハウスやクリスマスのキャロリングの他、「聖書の会 Bible

Study Meeting」を開催していました。他にも自分の子供たちが入っていたクラブ活動の音楽や演劇などの練習にも使われていました。

—— 22年間で変化したことはありましたか？

ICUそのもののコミュニティの雰囲気の変化を住宅に集まる学生からも感じていました。

学生の雰囲気や、家への集まり方がその時々でICU全体の雰囲気を映しているようでした。大学紛争などキャンパスに入れない期間には、キャンパスでも分断が起きていたのかもしれませんが。そして、ICU献学時を知る1桁期の卒業生が教員をしておられた時代があり、私たちは、その方々から受け取ったものを継承しようとした時期だったのかもしれませんが。

前述の「聖書の会」は2003年4月に始めました。初期の参加学生たちが卒業すると、毎週1-2人のみの参加だった頃がしばらく続きました。2013年

頃からは参加人数が増えていき、退職前の2018年には毎回30名ほどが集まる会になっていました。

居住者である教員側の変化として、2000年過ぎくらいには時代の変化や社会情勢もあり、一時期、住宅を開放し学生を自宅に招く機会が少なくなった時期がありました。ここ2-3年は、やはり社会情勢を受けて、また読書会や聖書勉強会として定期的に自宅を開放して学生を招く教員が、キャンパス内外に増えてきました。

教職員住宅での教員と学生との時間は、学生にコミュニティの「場」が提供されていると思います。以前は住宅では先生を困むものでしたが、近年になるにつれ、だんだんと人が集まる「場」、コミュニティとして機能するようになりました。このコミュニティに参加した経験が、学生に、社会に出てもつながる仲間との出会いを、提供しているように見えます。キリスト教精神に基づく「場」として、教室で学ぶ

ことよりも、もっと色々なことを学ぶ場所になっているのではないしょうか。



インタビューに答える鈴木寛先生



聖書の会の様子 (大和田卓さん提供)

佐野好則先生インタビュー

—— 今のヴォーリズ設計の教員住宅にはいつからお住まいですか？

2年前（2021年）の9月から住んでいます。ノンジャパニーズの教員向けに建てられたヴォーリズ設計の住宅がリフォームされ、引っ越してきました。ヴォーリズは、教員が多くの学生たちを招くことのできる教育施設として教員住宅を設計したと聞いたことがありましたが、住んでみるとそのことがよく分かります。近くに住んでいる教員家族どうしの交流も盛んで、一つのICUコミュニティとなっています。

—— 家で好きな場所などがありますか？

暖炉のある落ち着いた雰囲気のリビングルームがお気に入りの場所です。リフォームで暖炉の煙突はふさがれてしまったものの、暖炉を囲むようにしてソファや椅子を置いて十数人は座ることができるようにしています。ベランダにはバーベキューセットや七輪を置いて野外で魚を焼いたりお湯を沸かしたりお鍋をしたり、また晴れた日はソーラーパネルを付けた蓄電器を置いて夜に使うために蓄電しています。野川公園の鳥の保護区域と家の周りの林

がつながっているので毎日多くの鳥がやってきて鳥のさえずりで目が覚めます。

—— ヴォーリズ住宅での印象深い出来事がありますか？

C-Weekのオープンハウス、学期末ごとの授業の打ち上げ、年度末の卒論発表会や、時々持たれるお茶会やお食事会など、学生たちや先生がたやそのご家族を招いての交流会が楽しい思い出となっています。

このヴォーリズ住宅に最初にお住まいになったのは、西洋古典学・新約聖書学の神田盾夫先生ご夫妻でした。印象深い出来事として、神田先生の教え子でいらした1期生の川田殖先生、2期生の葛西實先生、5期生の川島重成先生、11期生の安村典子先生をそれぞれお招きした時に、学生時代にあたかもタイムスリップしたかのように、この住宅での神田先生ご夫妻との数々のエピソードを懐かしそうに熱くお話くださったことも印象深いです。

初期のICUは戦後のまだ日本全体が貧しかった時代で、戦前に欧米に留学された神田先生ご夫妻からテーブルマナーや西洋料理を学んだり、初めて紅茶やオープンで焼いたケーキをいただいたり、ピアノやバイオリンのミニコ

ンサートを開いてくださって西洋音楽を楽しんだり、当時の学生たちには新鮮な驚きの連続だったそうです。

私たちもICUの卒業生なので、学生の頃には先生方の開いてくださるオープンハウスに参加したり、指導教員であった川島重成先生や斎藤和明先生（2期生）の学内住宅にお食事に招いていただきました。川島先生は毎学期の終わりに教え子たちを招かれ、繁子夫人の作ってくださった美味しいギリシア料理をいただきながら、古代のシュンボシオンのように夜遅くまで学問

をはじめ様々なお話を楽しんだ思い出があります。

このようにICUの開学当初から教員住宅では、教室では学ぶことのできないトータルな人間教育、そして人格教育が行われてきました。私たちもまたICUの恩師の先生がたからしていただいたことを同じように今の学生たちに返したいと思っています。このことはICUのユニークな伝統として次の世代につなげていけたら良いと願っています。



佐野先生の住宅での学生たちが語らう様子 (佐野正子さん提供)



インタビューに答える佐野好則先生と正子さん

今回紙面には載せきれなかった多くの貴重なエピソードをお聞きました。読者の皆様にもそれぞれ学生時代の先生のご自宅での思い出があるだろう。あなたの「教職員住宅での学び」に想いを馳せてみてはいかが？

Special Interview

スペシャルインタビュー
PEプログラム
山内宏志先生

「審判のアクションは、ときに勝利至上主義や暴力・差別との戦いでもあります。その意味で私は世界のサッカー界で平和構築を実践してきたと自負しています」

山内宏志先生は、サッカーの国際副審として、2016年のリオデジャネイロ五輪や18年のFIFAワールドカップ・ロシア大会に参加したほか、国内外のビッグマッチを支えてきた。サッカーの審判の世界とはどのようなものなのか、またこれからのICUのPEについて貴重なお話をうかがった。

文：太田順子（本誌） 写真：太田順子（p.10） その他、本人提供



地球を模したサッカーボールを手に。2023年12月ICUにて

選手から審判へ

—— サッカーの審判活動を始めたきっかけを教えてください。

サッカー少年だった私は、大学でもサッカー部に入ったのですが、半年ほど経ったころ、チームメイトのレベルの高さに「自分の実力ではプロ選手を目指すのは難しいな」と思い至りました。でもとにかくサッカーが好きだったので、将来も何らかのかたちでサッカーに関わり続ける道はないのだろうかと思案し始めました。そんなときに先輩に誘われて関東大学サッカー連盟主催の審判講習会に参加したら、とても面白かったのです。

—— 審判のどのような点が面白かったのでしょうか。

じつは、審判を始めるまでは審判の存在を意識したことがありませんでした。それまでは、ひたすらプレーして、笛が鳴ったら止まるということだけを

やっていました。審判として試合を支える側を体験して、初めてそのありがたみを感じました。また、審判を始めたことで視野やプレーの幅が広がり、選手としても成長できました。箸にも棒にも掛からなかった私が、大学4年時には関東1部リーグで将来の日本代表やJリーガーとともにプレーできました。そのことは大きな自信になって、審判活動をする上でもずっと自分の支えになったと思います。

また、競技規則についても知らないことが多く、ただ知っているつもりだったことに気づきました。なぜそのルールができたのかを学ぶことは、サッカーの本質や精神に迫ることにつながります。それが面白く、またその気づきを得たことが、後のイングランドへの留学と審判体験につながったと思います。

—— 2008年にJリーグに審判登録をされてから23年に引退するまでの15

山内宏志

YAMAUCHI, Hiroshi

1979年愛媛県生まれ。ICU保健体育プログラム専任講師。元日本サッカー協会（JFA）プロフェッショナル・レフェリー、元国際副審。2003年東京学芸大学大学院修了（修士：教育学）、2006年リヴァプール・ジョン・ムーア大学大学院修了（研究修士：スポーツ生理学）、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程在籍中。サッカーの審判活動は1997年大学1年時に開始。2006年1級審判員、14年国際副審に登録。18年、JFAとプロ契約締結、同年Jリーグ最優秀副審賞を受賞。ICUには2013年に着任。審判活動のための休職を経て、23年4月に復職。

年間で、印象深い変化はありますか？

真っ先に思い浮かぶのは「VAR（ビデオ・アシスタント・レフェリー）の導入」です。VARは、フィールドとは別の場所で、異なるアングルから記録された複数の試合映像を見ながら主審をサポートする審判員のことです。海外では2016年ごろから導入が始まりました。でも日本は、ほかのサッカー強豪国などと比べ、J1（日本プロサッカーにおける1部リーグ）でのVAR導入が2020年と少し遅れました。そのため、できるだけ早く世界に追いつく必要がありました。

私は国際審判員として先駆けて海外でVARを経験する機会をいただいたので、それを日本に持ち帰り、情報を伝える役割を担いました。とくに、すべて英語で行われているやりとりを、どのように日本で取り入れるかには苦慮しました。英語のままでは皆が直感的に使えないし、すべてを直訳すると本来のニュアンスが失われてしまいます。そこで、キーフレーズの英語は残し、細かな説明ややり取りは日本語にするという提案をしました。その中で生まれたのが「オフサイド・ディレイ」という言葉です。VAR実施時に、副審がオフサイドの旗を上げるのを遅らせることを指す言葉です。審判技法としての概念は世界共通ですが、この言葉は日本独自のいわば和製英語です。でも直感的に理解してもらうには役に立ったと思っています。

サッカーの歴史において、大きなパラダイムシフトであるVAR導入を、国際審判員として最前線で経験できたことは本当に貴重でした。私が参加した2018年のFIFAワールドカップ・ロシア大会は、初めてVARが導入され

たワールドカップ大会として今後も語り継がれていくと思います。

サッカー審判員の世界

—— サッカーの審判員にはどのような資質が求められるのでしょうか。

本当に多くの能力が求められます。良い選手が必ず良い審判員になれるというわけでもありません。

まず、トップレベルの審判について言えば、高い身体能力、パーソナリティ、インテリジェンスの3つだと思います。

現代サッカーは、攻守の切り替え、判断、縦・横の動きなどすべてが高速化しています。審判は、そのスピードについて動き、選手の細かい動きを確認しながら判定するわけですので、求められる身体能力はかなり高いものになります。たとえば、サッカー1試合の走行距離は主審12km（選手とほぼ同等）、副審約7km（距離が短い分、スプリント回数が多い）と言われていいますので、長距離と短距離の両方を高いレベルで走り切る体力が必要です。またスポーツビジョンと呼ばれる複合的な動体視力も問われます。さらにリーダーシップ、アサーティブネス（相手に配慮して自己主張する力）、自己効力感、共感性、そして論理的思考力と英語も含めた言語能力などが求められます。

これらはある程度は努力によって高められるものではありませんが、国際審判の場合は時差と気候の変化に頻繁に順応しなければならない上に、極限のストレス下での仕事になるので、もともと備わった能力もやはり必要です。じつは、判定の精度を高めることはそれほど難しくありません。ポジショニングを体得し、映像とすり合わせてディープラーニングしていけばある程度できるようになります。

次に、すべての審判員に求められるものとして、「利他の心」が挙げられます。人のために何かをできる人しか、審判員を続けていくことはできないと思います。私はこのマインドを世界中の審判仲間から学びました。

—— 審判員はどんな生活をしている

のでしょうか。

日本には、グラスルーツからトップリーグまで、約27万人の登録審判員がいます。これは世界一の規模です。「サッカーの審判員」が一つのジャンルとして確立されていると言ってもいいでしょう。

プロ契約をしている審判員はほんの一部なので、ほとんどの審判員は副業として審判活動を行っています。私もかつてそうでしたが、平日は仕事をして、週末は審判員をするというサイクルです。

一方、プロ審判は、基本的に週に1、2試合を担当し、その前後に移動、トレーニング、振り返り、研修が入ります。試合数だけみると時間的な余裕がありそうですが、ここに海外の試合が入ってくると、身体的にも精神的にもかなりきつい仕事と言えます。たとえば火曜日の日本時間の深夜にサウジアラビアでアジア・チャンピオンズ・リーグを担当して、帰国後、土曜日の昼にJリーグのビッグマッチを担当するといったスケジュールになることも多々ありました。

とくに難しかったのはコンディショニングです。幸い私は大きな怪我をすることはありませんでしたが、キャリアの終盤には複数箇所の痛みに悩まされ、医師、理学療法士、鍼灸師、柔道整復師の方々には本当にお世話になりました。命の恩人です。

2020年以降はこれにコロナ禍が加わったことで、出国時検査、渡航、隔離、大会、帰国時検査、隔離、国内でのバブル対応、再出国のようなサイクルも経験しました。1年の3分の1以上、家に帰ることができなかった年もありましたし、隔離が続いたために身体のケアのための通院が思うようにできなくなってしまいました。サッカーの世界でもパンデミックの影響は大きかったです。

サッカーは地球上のほぼすべての地域でプレーされていて、そこには審判たちがいます。この世界中にいるレフェリー・ファミリーによって、今日もゲームが成り立っています。パンデミックの中ではありましたが、ワールド

カップの審判候補として最後まで活動できたのは、家族はもちろん、周囲の理解と支えがあつてのことです。感謝は尽きません。やり切った、という思いで現役生活を終えられたことは幸せなことだと思っています。

ICUのPE

—— プロ審判員を勇退されて、2023年4月からICUに復職されました。

サッカーの審判活動を学問的な営みだとして休職を認めてくださったICUには本当に感謝しています。この1年は、サッカーで得たものを一度手放して、先入観を捨て、新しい目でものを見る努力をする時間だったように思います。現在はPEの実技クラスを担当しているのですが、ほぼ毎日授業があるので、その準備、実施に新鮮な気持ちで取り組んでいます。

—— PEの授業内容は変化しているのでしょうか。

卒業生の皆さんの多くは、セクションごとにPEのクラスを割り振られ、あの水深4mのプールを泳いだことを記憶されていると思います。現在は、最大20名のクラスで履修クラスは自由に選択でき、水泳も必修ではなくなりました。2017年度から新カリキュラムとなり、春学期は身体を動かしながら、主として課題解決型のグループアクティビティを行うようになりました。運動の得意不得意に影響されないように、コミュニケーションゲームやレクリエーションの要素を多く取り入れています。

たとえば「パイプライン」というゲームでは、ひとりずつ縦半分に切った30cm前後のパイプを持って、10名前後で1個のビー玉をパイプをつながながら転がし、15m先のゴールの筒まで運びます。一度でもビー玉が落ちたり、逆方向に転がったり、手がビー玉に触れたりしたら、スタートからやり直しになります。順番や戦術などを全員で合意形成しなくてはならないため、必ずコミュニケーションが生まれます。

このような活動を通して、ウェルビーイングを高めながら、大学に慣れること、各々のコミュニティ作りを促す



2021年のアジア・チャンピオンズ・リーグ(サウジアラビア)でライン際を走る山内氏

ことを意図しています。私は極力ファシリテーターとして関わるように意識しています。最初にルール説明をしたら、あとは安全確保とグループの動態観察をして、タイミングを見ながら、個人やグループでの振り返りを促します。省察活動を重視するようになったことも、新カリキュラムの特長です。

スポーツと平和構築

—— これから取り組みたいことについてお聞かせください。

ひとつは、リベラルアーツ教育に関わる者として、研究活動と教育つまり授業の実践を深めていきたいです。私の研究分野は体育心理学なのですが、現在、2017年度より開始されたICUの保健体育カリキュラム改革の検証について博士論文にまとめています。ICUのPEは、レクリエーションや野尻キャンプに代表されるような野外教育が根底にあって、それを反映したプログラムになっている点がユニークです。すでにさまざまな分析を終え、興味深い結果が得られています。大学体育の「新しいモデル」をICUから発信できたらうれしいです。

もうひとつは、サッカー審判活動の経験を抽象化して応用、また伝達できるようにしたいです。

審判活動を振り返って印象深く思い出されるのは、紛争を抱える国の代表チームの誇り高い振る舞いや、政治的に対立する国のチームが中立国での試合で見せたフェアプレーです。審判として、それらを引き出すために、試合が間違った方向に進むことのないように、さまざまなアクションを行いまし

た。それらは勝利至上主義や暴力・差別との戦いでもあったという意味で、平和構築(Peacebuilding)の実践だったと自負しています。ピッチの中で、心理的な安全性、信頼関係そして自由を保障されることで、プレーヤーは自律的に躍動的に動けます。そういう試合は魅力的です。選手も、コーチも、審判も人間。お互いが自分たちの不完全さを許容しつつ、一緒にすばらしいゲームを作るのだ、という一体感を感じられたときに最も深い喜びが得られました。

これは、授業でも、社会においても同じなのではないでしょうか。ICUは多様性を尊重し、異なる他者を受け入れる精神文化が脈々と育まれている場だと思いますが、PEの授業を通して、さらに学生たちと対話を深めていきたいです。

最後に、ICUのアラムナイにはサッカーの世界で活躍されている方々がいますよね。現在WEリーグ(日本女子プロサッカーリーグ)チェアを務める高田春奈さん(45 ID01、アラムナイニュース133号に登場)、日本ブラインドサッカー協会専務理事兼事務局長で国際視覚障害者スポーツ連盟理事も務める松崎英吾さん(47 ID03、2021年度DAY賞受賞)がそうです。お二人ともサッカーを通して平和な世界を創っていくのだという強い気持ちをもって活躍されています。スポーツ界もピースビルダーを求めています。ICUのアラムナイ、また在学生で興味のある方には、ぜひスポーツ業界に来てほしい、ということをおの場を借りてお伝えしたいです。



2022年6月、韓国ーブラジルの親善試合にて。右端が山内氏。



左から／PE サッカー／PE フットサル

Special Interview

スペシャルインタビュー 武術世界大会出場 池内理紗さん

池内理紗
IKEUCHI, Risa

1995年、埼玉県出身。9歳のときに中国武術を始め、主な競技成績は2017年の世界武術選手権大会で棍術2位、刀術3位、2023年の全日本武術太極拳選手権大会で長器械2位、同年11月の世界武術選手権大会で長拳12位、刀術11位、棍術7位など。

「ICUでの学びで、社会に出てからも、自分の世界を積極的に広げようと思えたし、仕事や武術での関係なさそうな経験を、点と点で結びつけることができました」

昨年11月にアメリカで開かれた武術の世界大会に、池内理紗さん(62 ID18)が日本代表として出場し、「棍術」で7位など優秀な成績を収めた。ICU在学中も勉強と両立しながら練習に励んできた池内さんは、卒業後も会社員と両立しながら練習に取り組んできたが、同大会で現役を引退。これまでの歩みを聞いた。

文：滝沢貴大(本誌) 写真：本人提供



昨年7月の全日本選手権で演舞する池内さん

武術を始めたのは9歳のとき。中国から武術の先生が来日し、スポーツチームを立ち上げるという話を持ち上がった。母が趣味で太極拳をやっていた縁で声がかかり、見学に行くことに。「軽い興味で行って見たら本当にかっこよくて。先生の動きが人間のものじゃないみたいに感じられました」。チームへ参加することになった。

学業との両立、そして留学も

それからは、学業と両立しながら研鑽を重ねた。周囲にはスポーツ系の専門学校に行く選手も多かったが、「自分の世界を広げたい」とICUへ進学。在学中も、時期によっては週6日ペースで練習に打ち込みつつ、イギリスのシェフィールド大学へ交換留学するなど文武両道を体現した。留学中も、ジムで体を鍛えたり、毎週末マンチェスターに電車で出向いて、現地の武術のチームに参加したり、鍛錬の手を緩め

なかったという。

武術の大会には、実際に戦う「散打」と、体操競技のような形で点数をつけて順位を争う「套路(とうろ)」の大きく2種類の枠があり、池内さんは套路の選手。套路の選手は何も持たない種目と、「短器械」「長器械」の3つの種目群の中から、1種目ずつを選ぶ。池内さんの専門は、手足を大きく使う「長拳」、棒を用いて演技をする「棍術」、刀を用いて演技をする「刀術」という。

留学から帰国後の2017年、ロシアで開かれ世界64か国から約900人が参加した世界大会「世界武術選手権大会」に出場すると、棍術で世界2位にあたる銀メダル、刀術で同3位の銅メダルと栄えある結果を残した。

仕事と両立しながら世界大会へ

卒業後はリクルートへ就職した。もっと武術と両立しやすい会社も選べ

た。でも、「選手としてできるのも、新卒として働けるのも今だけ。大変なのはわかっていたが、どっちも私にとっては大切だった」。当然、練習があるからといって仕事を免除してもらえないわけではない。担当は不動産情報サイトの広告営業。「ほかの新卒と同じ、もしくはそれ以上の成果を出さないと」と身を奮い立たせた。「『成果出してないくせに早く帰るな』って思っていた同僚もいたと思う。正直、『なんでこんなしんどいことをしているんだろう』『もう辞めようかな』と何回も思いました。けど、今まで自分ががんばれたのは、リクルートと武術を両立してきたからこそだと今となっては感じます」

世界大会には、在職中も参加してきた。2019年に上海であった世界選手権では、入賞したもののメダルは逃した。「悔しかったが、自分自身の成長は感じていた。大学時代よりうまくなったと胸を張って言えるが、周りの国の成長スピードがすごかった」。次の目標は、2022年秋に中国・杭州で開かれるアジア競技大会に据えた。4年に一度開かれ、アジアが本場の武術においてオリンピックのような存在の大会だ。コロナで延期になり、開催は2023年の9～10月に。手応えはあった。だが、出場権を逃してしまった。

「まだ、動けなくはない。でも、動けるうちに、自分の力を出し切れるうちに引退しよう」。同年11月に開かれ、こちらは出場権をつかんだ世界選手権で引退することを決意した。

結果は、「長拳」で12位、「刀術」

で11位、「棍術」で7位。学生時代以来のメダルをつかむことはできなかったが、やりきった。

武術と仕事を両立してきた中で、大学での学びが生きていると感じる場面は何度もあったという。「ICUでの学びは、私の価値観を作ってくれた。リベラル・アーツの学びの中で、一見関係なさそうなことが実は関係しているとわかったり、それを結びつけることで何かを生み出したりする体験をした。社会に出てからも、自分の世界を積極的に広げようと思えたし、仕事や武術での関係なさそうな経験を、点と点で結びつけることができました」

今後は、大会への出場はしないものの、「武術自体はめっちゃくちゃ好き」。イベントでパフォーマンスを披露したり、練習会へ参加したりは続けていく予定という。

新たな道へ挑戦

現役引退と時を同じくして、リクルートも退社して新天地へ挑戦する。同じ不動産関連だが、これまでの営業職からマーケティング系の職へ転じる。「もともと、社会人として必要なスキルを身につけたくて入った会社でした。それはある程度身につけられた手応えもあるし、これまで武術と両立してきたからこそがんばれたので、この仕事一本でがんばるビジョンがなかった。武術にかけてきた熱量分、新しい仕事にかけたいと思っています」

選手としては一区切りを迎えた池内さん。文武両立やICUでの学びの経験を踏まえて、新たな道へ進む。





未来予想ZOO

～ICU卒業生ならではのさまざまな生き方から学ぶ～

文：松本典子 (45 ID01) 写真：同窓会学生部

2024年1月20日（土）、ICUキャンパス内の楓寮・縦寮1階ウイステリア・ホールにて、同窓会学生部主催・大学協賛によるイベント「未来予想ZOO」が開催されましたので、その様子をご報告致します。

「未来予想ZOO」は、在学生を対象としたイベントで、卒業生ゲストとのセッションを通じて、就職活動とは異なる切り口から、卒業生の生き方・考え方の多様性を知ってもらい、大学での過ごし方や卒業後の“生き方”について考えるヒントを得てもらうことを目的にしています。コロナ禍を経て、ようやく4年ぶりのリアル開催をすることができました。

当日は雨模様でしたが、1年生から4年生までの62人の在学生が参加してくれました。イベントに参加した卒業生は、同窓会学生部のメンバーを含め27人。その他、大学関係者、同窓会関係者の皆様にもご協力いただきました。

卒業生ゲストの顔ぶれは、「ZOO」というタイトルにふさわしく、金融系IT部門会社員を辞めてプロ麻雀士、銀行員から町長、テレビ番組制作から

劇団を立ち上げ、子育てしながら劇団の活動、IT系企業会社員から起業して外資系日本子会社社長、アカデミックの道を進み東大准教授、医学部学士編入して医師、認定遺伝カウンセラーになって起業などなど…学生時代のメジャーもさまざまなら、現在の生き方もさまざま、現在に至るまでの過程もさまざま、ICU卒業生らしい多様性に溢れていました。

卒業生には、事前に「学生時代に力を入れたこと」「卒業後のキャリア」「学生時代、悔いが残ること／うまいかなかったなと思うこと／今の自分ならどうする?」「学生時代、やっておくと良いこと・良かったこと・現役の在学生に伝えたいメッセージ」といったアンケートに答えていただきました。当日はグループに分かれて、在学生からの質問に答えてさらに突っ込んだ話をしたり、ディスカッションをした後、ウイステリア・ホールに全員が集合して、思い思いに対話を深めました。ICUという同じ場で学んだ者同士でなければできない交流の場となったのではないかと思います。

どのグループでも、在学生は、卒業



生からヒントを得ようと積極的に質問をしている様子が見られました。参加した在学生からは、「将来のことに悩んでいたが、小さなことに思えてきた」「思い切ってがんばってみようと思った」などの声を聞くことができました。

また、卒業生たちも、在学生に対して、自分自身の学生時代を振り返って真剣に回答しようとしていました。その根底には、「悩むことも含めて今しかできないことをとことんやってほしい」「ICUでの学生生活を悔いなくと

ことん楽しんでほしい」という熱い思いが込められていたように思います。

今回の「未来予想ZOO」が、在学生にとって、大学時代の過ごし方やその後の「生き方」のヒントを得られる場になっていると嬉しいのです。

今後も、同窓会学生部では、在学生のニーズを聴き取り、同じICUで過ごした卒業生ならではの在学生へのサポートを提供していきたいと考えています。

通訳・翻訳 36年の経験と実績

We need your help!

通訳者・翻訳者
募集!

●主要顧客：官公庁、民間企業
(やりがいのあるお仕事多し)

お客様から、これまでどおり、“心に響く”通訳、人の“ぬくもり”のある翻訳をお願いしたいと念をおされています。

ICU同窓生の皆さまのお力を貸してください。

●通訳：会議、セミナー、商談、会見など（「オンライン通訳」に対応可能な方）
●翻訳：IR資料、契約書、学術論文、通信文、パンフレットなど

▶英語、仏語、西語、露語、中国語、韓国語、その他アジア言語
※通訳・翻訳のお仕事のご相談・ご依頼も歓迎します。

ホームページを
リニューアルしました

通訳・翻訳・制作（デザイン・印刷）

(株)エクシム・インターナショナル
EXIM INTERNATIONAL, INC.

創立
36年

TEL 03-3431-2118
URL: <https://www.exim-int.com/>

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 セネラルビル3F ●TEL 03-3431-2118 ●E-mail: tokyo@exim-int.com

Chairman 永島 克彦 (14期) Advisor 比奈地 康晴 (14期)

松本中央法律事務所

Matsumoto Central Law Office

弁護士 松本 典子

(ID01・45期・理学科生物学専攻卒業)

懇切丁寧に対応いたします。

お気軽にお問い合わせください。

全国からZOOM・電話相談対応

TEL

03-5776-2435

東京都中央区日本橋小網町8-2

WEB

<https://www.m-laws.jp>

E-mail: n.matsu@m-law.jp

取扱分野：企業法務一般・契約締結交渉・離婚・男女問題・遺言
相続・環境問題・労働問題・債務整理・刑事弁護など





後藤そなさん



4人のライブ



ジャズバンド



神鳥竜彦さん (19 ID75)



二胡チーム

アラムナイカフェで同窓生がライブ演奏 2023年ICU祭開催報告

ICU祭が開催された10月8、9日の2日間、本部棟北側のアラムナイハウス2階のラウンジでは、同窓会が運営する恒例のカフェがオープンした。

文：新村敏雄（本誌） 写真：同窓会事務局

今回は、初の試みとして、営業中のラウンジの一角で同窓生に音楽を演奏してもらえないかと9月に発信した同窓会のメールマガジンで呼びかけたところ、さまざまなジャンルの音楽を嗜む希望者が手を挙げてくれた。当日は、来客がスイーツやコーヒーを楽しみな

がらソファでゆったりと音楽に耳を傾ける姿が見られた。

自作の詩とメロディで語るように歌った後藤そなさん（旧姓河崎、57 ID13）は「3年生のころ、『吟遊詩人』になりたいと思いましたが、今日やっと、初めて人に聞いてもらうため

に歌えました」と満足げだった。「歌ってみての発見もあった。作曲の部分をもう少し詰めたい」。

ほかの演奏者からも「素晴らしい環境で楽しく演奏ができました」（ジャンルはボサノバ&ラテン・ジャズ）、「久しぶりに母校に行き、懐かしさとたく

さんの変化を感じることができました。アラムナイハウスでの演奏、とても気持ちよかったです!」（同ジャズバンド）、「この度は貴重な機会を、ありがとうございました。ぜひまた、来年も参加させて頂ければ幸いです」（同ピアノ弾き語り）といった感想が寄せられた。

症状を改善して 元気な毎日を送りたいあなたへ

ICU卒業生の佃隆（44期ID00）とパートナーの佃美香が1993年より運営しており、毎年1万人以上の方が通院されています。三鷹駅南口徒歩1分の当院では、姿勢のゆがみと症状の関連性を見極めるカイロプラクティック検査を行い、症状の原因を特定します。

ファミリーカイロプラクティック三鷹院

「ICUアラムナイニュースを見て…」とお電話ください。

tel 0800-888-4270

web <http://mitaka-chiro.com>

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀3-24-7 平瀬ビル301号室



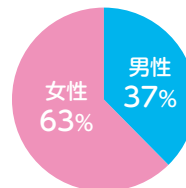
当院の統計データ

過去1年間の初診時の症状別の割合

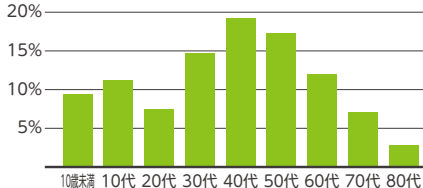
腰	腰痛(腰椎椎間板ヘルニア)・背部痛・坐骨神経痛・お尻の痛み・胸部痛
首	首の痛み(頸椎椎間板ヘルニア)・首のこり・頸椎症
下肢	足・膝・足首・かかと・足の指・足底筋膜炎・股関節痛・外反母趾
肩	肩の痛み・肩こり・五十肩・胸郭出口症候群
上肢	腕・肘・手首・手の指の痛み・しびれ・震え・手根管症候群・ばね指
耳	突発性難聴・耳鳴り・耳の閉塞感・中耳炎・耳管開放症
自律神経	自律神経失調症・起立性調節障害・不眠症・高血圧・低血圧
頭部	頭痛(緊張型頭痛・群発性頭痛・偏頭痛)・顔面痙攣・顎関節
姿勢	姿勢のゆがみ・ねこ背・側弯症・骨盤の歪み・O脚・X脚
胃腸	胃腸症状・逆流性食道炎・過敏性腸症候群・便秘・下痢・吐き気
赤ちゃん	頭の形のゆがみ・向き癖・斜頸・便秘・手足の突っ張り・夜泣き・反り返り
女性ケア	産後の骨盤矯正・マタニティケア・妊活ケア・逆子矯正・生理痛
めまい	目まい・ふらつき・体の揺れ・立ちくらみ・メニエール
呼吸器	呼吸器系疾患・喘息・鼻づまり・蓄膿症・過敏気候群
目	眼精疲労・斜視・眼瞼痙攣・緑内障・花粉症・ドライアイ
お肌	皮膚炎・かゆみ・アトピー性皮膚炎・手湿疹(主婦湿疹)

0% 5% 10% 15% 20%

男女別の割合



年代別の割合



Think globally, act locally.

“ここ”から始まるストーリー

国内の“ある場所”で活躍する仲間にスポットを当て、その活動や経緯などについて話を聞く本シリーズ。今回は、朝日新聞の記者としてアジアなどで長く特派員生活を送り、その後、デジタルジャーナリズムなどを担当してきた藤谷健さんに話を聞いた。日本での仕事は東京が中心だったが、コロナ禍を機に、東京本社に在籍しながら沖縄県宜野湾市に拠点を移し、新しいウェブサイトの立ち上げ、運営などに取り組んできた。



2023年3月、西アフリカ・セネガルの学校で日本人起業家の活動について取材する藤谷健＝写真家中野智明さん撮影



FUJITANI, Takeshi

1982年ICU入学。在学中はサッカー部所属。87年朝日新聞社入社後、国内支局などを経て、英字紙記者、ローマ兼ベオグラード、ジャカルタ各支局長、アジア総局長（バンコク）、ソーシャルメディアエディター、新聞／デジタルの編集長である編集局長楠佐などを歴任。今年2月に途上国の開発課題とその解決策に焦点をあてたメディア「with Planet」を立ち上げる。これまで旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナやコソボ、旧ザイール、インドネシア・アチェ、ミャンマーなど紛争や被災の現場のほか、政治やスポーツ、民俗芸能を幅広く取材してきた雑食派ジャーナリスト。共著に「ローマ法王―世界を駆けるヨハネ・パウロ2世」（岩波書店）、「TSUNAMIをこえて―スマトラ島沖地震とアチェの人々」（ポプラ社）など。ロンドン大東洋アフリカ研究学院（SOAS）開発学修士。武蔵大学非常勤講師（国際ニュース研究）。東京都出身。現在、沖縄県宜野湾市在住。

途上国の問題、世界規模の課題を考え、伝える

沖縄県 朝日新聞 with Planetシニアエディター 藤谷 健さん（30 ID86）

文：長谷川由紀（本誌） 写真：本人提供

途上国の課題を考えるサイト

「対話を重ね『自力』を引き出す農業開発に伴走する NGO の手法とは」

朝日新聞デジタルの新しいサイト「with Planet」に執筆した記事は、アフリカ・セネガルで活動する日本の NGO の活動を通じ、国際協力のあり方を考える内容だ。

with Planet は、朝日新聞がビル＆メリンダ・ゲイツ財団とのメディアパートナーシップのもと、一部助成を受けて運営している。2023年2月にスタートした。フリーランスジャーナリストらの協力も得て、グローバルヘルスや教育、難民、地球温暖化など、主に低中所得国が直面する課題を取り上げている。

「いろいろな矛盾のしわ寄せが来ている。地球温暖化の問題なども含めてもっと共感し、一緒になって解決していかないと日本も立ちゆかなくなる」

英国メディアがゲイツ財団の資金で途上国開発問題に特化したサイトを作っていることを知り、同じようなサイトを始めたいと同財団に協力を呼びか

けた。すぐには実現しなかったが、その後、来日したビル・ゲイツ氏をイベントに招いたり、ゲイツ氏と妻（当時）のメリンダ氏が編集長を務める特別紙面を作ったりしているうちに話が動いた。

「購読制でも広告モデルでもない寄付・助成型の第三のモデルのメディア。普通の取材ではニュースになりにくいようなものが今は大切。日本がどのようにかわっているかも含めてそこを伝えられることが大きい」と考える。サイト運営に携わりながら、沖縄から世界各地に出張しながら執筆を続けている。

途上国問題へのこだわり

途上国の課題に関心を持ったのは ICU 在学中。政府の「東南アジア青年の船」プログラムで、東南アジア諸国連合（ASEAN）各国を訪問したほか、タイの山岳地帯で行われていたワークキャンプに参加した。興味が広がる中、4年次にフィリピンにあるシマン大学に交換留学した。

寮で暮らしながら勉強していたが、

周りには第二次世界大戦中、旧日本軍に身内が殺されたという人や、戦前にダバオにマニラ麻のプランテーションで入植した日本人の祖父がいると話する人もいる。留学中、マルコス独裁政権打倒を目指すピープルパワーも起きた。

「東京生まれで東京育ち。日本がやっていたことも含めて、知らないことが多かった。歴史を背景にしたことなどを肌で感じた」

当時は、途上国の搾取の問題や ODA 批判も出てきていたことで、現地で実態を取材し、伝えたいという思いから朝日新聞に入社。その後、欧州やアフリカ、アジアを中心に紛争や災害などの現場で取材を続けてきた。

2013 年からはデジタルに関わる仕事に軸足が移ったが、そこでも「途上国の開発問題や国際協力、世界の貧困などは、若い人に考えてもらいたい」と思い、若い利用者の多いデジタルを通じた発信を模索してきた。これが with Planet につながった。

沖縄と世界

宜野湾市にマンションを購入したの

は 2009 年。ついの住み家を探していて、ダイビングによく行っていたことや、東南アジアにも似た気候、時間の流れが気に入ったという。

仕事の都合で東京と二拠点生活も送ったが、コロナ禍で仕事もオンラインが多くなったこともあり、会社の理解も得て、今は基本的に沖縄で暮らす。「例外だと思えますけどね」と笑う。

ただ、離れていたからこそ、他者の思惑などをそれほど気にせず、with Planet の立ち上げに取り組めたと感じている。

フィリピンなど海外各地で体感した複雑な歴史や関係と同じように、沖縄も複雑な事情を抱える。「新聞社で沖縄というと、なんだか沖縄のことをライフワークにするようなイメージがあるかもしれないが、関係ない」というが、途上国の問題や世界規模の課題、矛盾などを様々な角度から見つめ、どのように伝えるかを考え続けるジャーナリストにとっては、格好の場ではないだろうか。

お邪魔します! あのメジャー

第27回 言語学 李 勝勲 上級准教授

全31の中から気になるメジャーを紹介

今回ご紹介するメジャーは、言語学です。「言語学の現地調査で大切なのは、人と関わり関係を築くこと。人と話すことは好きなので、それで友人がたくさんできて。」にこやかに研究室に迎え入れてくださったのは、少数言語の音声学と音韻論を研究テーマとする李勝勲上級准教授。授業で大切にしていることや、言語学を通して学生たちに伝えたいことを伺いました。

文・写真：亀山詩乃（本誌）

知っているのに、何を知っているか分からない

見る、聞く、味や匂いを感じるという認知機能は人間以外の動物も持っていますが、言語は人間だけが持つもの。その私たちは毎日言語を使っているけれど、言語自体は見えません。日本語話者として日本語を知っているのに、なぜこの文章は正しいのか？ なぜこの接尾辞がありこのように発音するのか？ と問われても、答えられないでしょう。例えば、柿はカキ↑で牡蠣はカキ↓なのに、カキフライだとカキ↑になるのは、習ったこともないのに知っています。誰も自分は言語を知っていると思っているのに、実際は何を知っているか知らないわけです。全員が持っているのに、目に見えず、何を知っているか知らないのが言語です。

人間の本質について考える学問

言語学は、脳科学や生物学、最近は認知科学やコンピューター工学とも関わりがあります。Chat GPTは人工知能として語られることもありますが、本当に知能なのでしょう。膨大な言語データを処理して学習して最適な答えを求めているだけであり、本当の意味で考えることはできません。また、スパムフィルターは学習したスパムの形でなければ認識できませんが、人間は異質なものをすぐ認識できます。1億通り学習したとしても、1億1通り目は、人間は認識できてもスパムフィルターには認識できないと思います。言語学は、言語という研究対象を通して「人間とは何か」ひいては「人間の本質」について考える学問であるとも言えます。

現在研究していること

私は博士論文（理論言語学）で、南アフリカ共和国のツォンガ語を研究しました。アフリカでは南アフリカを主なフィールドとしており、2010年頃からはほぼ毎年訪れています。他にはインドのシッキム州の少数民族言語、中国の少数民族言語、ビルマ語、宮古島方言、波照間島方言、韓国の方言、南太平洋のキリバス語などを研究しています。研究では人との関わりや関係の

構築が大切で、現地を訪れて「データをください」と、それで終わることも後戻りすることもできません。人と話すことは好きなので、長年の研究で多くの友人ができました。世界各地にいる少数民族言語の研究者と一緒に研究することもあります。今は主に3つのプロジェクトに関わっています。1つ目は、南アフリカの言語が、文構造の複雑さによってどのようにイントネーションが変わるかという研究。「昨日何を食べた？」という福岡弁のように音が上がっていくイントネーションが、アフリカにはたくさん存在するので、それを調べています。2つ目は高齢者の文処理に関する研究で、3つ目は音声類型論の研究です。

学生と一緒に研究することの大切さ

研究にはいつも学生が関わっています。データ処理をお願いし、そのデータを使って学会で一緒に発表することもあります。発表には学生同士の協働も必要で、単に頭が良い人として卒業していくのではなくcollegialityも大切にしています。以前、落語に携わる学生と出会う機会があり、ちょっと研究してみようかということになりました。彼は歴史学メジャーでしたが、落語サークルの大学生8人のデータを取り、音声学会と一緒に発表し、チェコの国際音声学会でも発表しました。彼は歴史学で卒業しましたが、このように学科を超えて研究して発表するという経験は、ICUでしかできないことではないでしょうか。

私の授業は、学生が考える機会が非常に多いです。200番台の授業からは筆記試験ではなく、授業で学んだことに基づき学会に提出するような形式で論文にまとめます。論文を書く機会が多いと、それが練習となり良い卒論が提出されますし、大学院に進学する学生はその論文を使えます。少しだけ言語学のプロジェクトに関わった学生でも、卒業論文だけでなく学会で発表した言語学の論文があるのが特徴です。

世界の言語は平等

私が担当する一般教育科目では、さまざまな地域の言語を紹介したり、自



分の研究を話したり、多様な言語の研究者（2023年度は米国のチェロキー語の研究者）に講演してもらったりします。ある学生の感想には、こう書いてありました。「多様性の話はあらゆる場所で聞くが、西洋や米国が多く、この授業のように少数民族のことを学ぶ経験はあまりなかった。」フィールドメソッド（言語学特別研究 II）では、外国出身のICU大学院生をTAとして採用し、その方の言語を1学期間かけて調べます。授業内はもちろん、授業外でも毎週必ず10～20分は会ってデータを取って分析します。2023年度春学期はウガンダ出身、2024年度は南スーダン出身の方で、過去にはズールー語、フィジー語、キリバス語、パシュトー語などの言語も扱いました。世界に6500も存在するという言語、学生たちには言語の多様性を知ってほしいです。

私たちはすぐ「差」について考えてしまう生き物です。しかし、言語の「差」は脳自体が違うのではなく、幼少期に生成された文法を使っているだけで、知能も知識も同じです。言語学を学んだ学生には「発音が違う人や方言を使う人を見ても偏見を持たない」「言語の差別はしない」「言語の差を認めること自体が偏見のない社会をつくる」これだけは覚えていてほしいと願っています。偏見や先入観は「言語」の違いから始まる場合が多いからこそ、言語学は全ての学生に履修してほしいですね。

イ,スンファン LEE, Seunghun

国際基督教大学 上級准教授
ソウル国立大学でM.A.（言語学）を取得後、ラトガース大学にてPh.D.（言語学）を取得。2015年9月にICUに着任。専門は、言語学で、音声学・音韻論、理論言語学、言語記述（アフリカ、チベット・ビルマ、南太平洋、韓国語、日本語）を扱う。ICU Working Papers in Linguisticsシリーズを発行するほか、論文「Constituent Structure and Sentence Phonology of Korean」を筆頭著者として発表している。また、優秀論文発表会を毎年主催している。

言語学のデータ

● 開講されている主な授業科目
（2023年度現在）

言語学入門I、II

語用論

統語論

言語学特別研究I-III

言語学上級セミナーI-IV

英語学

形態論

音声学

語彙の研究

音韻論

意味論

社会言語学

実験言語学

ICU Working Papers in Linguistics

期末レポートや授業でまとめた論文を、学生が編集して冊子にしたもの。国際基督教大学リポジトリに全て保管されており、ダウンロードもできる。日比谷潤子前学長（言語学）が退職するにあたり、教え子たちや関係者から募った論文を集めた巻もある。

<https://icu.repo.nii.ac.jp/>
↑ 国際基督教大学リポジトリ





左から／2023 年度 花見ステージパフォーマンス／2023 年度 ICU 祭／少人数編成でコンボセッションにも挑戦

From the University 大学のページ

今回より、学生団体やサークルなど課外活動をご紹介します。献学時、または皆さまが在学されていた当時から続く学生団体が今も多数活動しています。学業だけにとどまらないICUのもう一つの魅力、課外活動における学生の活躍をご覧ください。

文・写真：各団体より提供

ICU Modern Music Society

ICU Modern Music Society、通称MMS（ムムス）はビッグバンド、特にスウィングジャズの演奏や、コンボジャズの演奏を主として活動しており、大学献学当初、故山野政光氏（1期、山野楽器第三代社長）らが中心となり設立されました（設立時名称：ジャズメンズ・クラブ）。日本ジャズの黎明期である1950年代に設立以来、60回以上に及ぶ定期演奏会を継続的に開催し、数ある学生ビッグバンドの中でも特に長い歴史を誇るクラブとなっています。2023年で70周年を迎えることができました！

MMSはコロナ禍以前に、山野ビッグバンドジャズコンテストへの出場や他大学とのジョイントコンサート、アメリカツアーなどを行っており、積極的な活動を行っていました。ところが、コロナ禍では活動が制限されたせいで、アクティブメンバー数が極端に減ってしまい、合奏や部としての活動ができない状況にありました。しかし、他大学の奏者へのエキストラ勧誘、また2022年から留学生やセプテンが入部した甲斐もあり、昨年9月以降はICU祭への出演をはじめ、ほか3つのコンサートを開催することができました。今年度に入ってから、学内の他団体との交流も深め、前年度に引き続きICU祭に出演、加えて学生サークル「Spanish Speaking Society」との合同イベントなども開催しました。現在は、山野ビッグバンドジャズコンテストへの出場へ向けて奮闘中です！

コロナ禍での活動制限や、演奏活動を自由に行えないなど、ここ数年困難の多かったMMSですが、それでもMMSのメンバーの個性や人柄の良さや団結力で、着実に活動を広げることができています。ICUにはさまざまな文化的バックグラウンドを持つ人がい

ますが、もちろん音楽でも同じことが言えます。MMSにはJ-POPをよく聴くメンバーもいれば、中高はビッグバンド一筋でやってきたという人もいますし、教会音楽で育ったというメンバーもいます。このような多様性の中では、メンバー間で意識するポイントも違っているため、スウィングジャズという一つのジャンルを演奏する上での共通認識を作っていかなければなりません。苦勞することも多々ありますが、異なる音楽環境で育ったメンバーだからこそ新しい視点や解決策が生まれることもあり、それこそが多様なメンバーでやることの面白さであり、この団体の大きな魅力になっていると思います。

設立から70年という長い歴史を持つ団体なので幸いなことにOBOGの皆さまとの交流もあります。特にID18など比較的最近卒業された方々とは、練習会やレッスンなどをしていただいております。大変励みになっています。また、OBOG主催のビッグバンドに現役生を呼んでいただくこともあり、大変貴重な経験になりました。他にも個別レッスンの開催など、OBOGの皆様に支えられて活動しています。コロナ禍で中断していたMMS Facebookの更新も今後頑張っていきますので、これからもMMSを見守っていただけると嬉しいです！

【設立年】
1953年（71年目）
【現在の在籍人数】
約30名
【活動日】
週3日 月・水・金曜日（学期によって変動する可能性あり）
【活動場所】
ディッフェンドルフアー記念館 西棟（新D館）地下1階 音楽練習室
【直近のイベントや試合等】
4月下旬に学内にてリサイタルを開催する予定です。コロナ前に途絶えてし

まったリサイタルの文化を取り戻せたいと考えています。

【SNSおよび連絡先】

Facebook: @icumms
X(Twitter): @mmsicu
Instagram: @mms.icu
Gmail: mmsicu@gmail.com

男子サッカー部

国際基督教大学男子サッカー部は1953年にサッカー同好会として設立され、現在ID26、27を中心に約30人の部員と監督、コーチらと共に活動しています。2シーズン前から関東大学サッカーリーグ戦東京・神奈川2部に所属しており、来シーズンは1部昇格を目標にチーム一丸となり日々トレーニングに励んでいます。

昨シーズンは、全員の予想をいい意味で裏切ることを目標として活動してきました。ICUサッカー部は全員が強豪校出身でもなく、さまざまなバックグラウンドを持った人が集まっています。中には高校でサッカー部に入っていなかった人もいます。そのようなチームが現在関東大学サッカーリーグ戦東京都・神奈川2部に所属して、格上チームに勝利するというのは私たちの活動する意義にも繋がっています。

勝利した時に巻き起こった熱狂は、日々の練習で積み上げたものが実を結んだのだと感じ、活動していて一番嬉しく楽しい瞬間でした。その一瞬を追い求めて日々の練習に妥協なく励んでいます。また、メンバーの仲がよく、ピッチ内では全員100%で取り組み、ピッチ外では年齢関係なく全員フラットな関係で喋るなど、メリハリがしっかりしているチームです。このことは選手だけではなく監督、コーチ、マネージャー全員にも共通して言えます。チームとしてのまとまりがこのサッカー部の魅力だと感じています。

現在幹部を務めるID26からはコロナ禍の部活動を実際に経験していませ

んが、コロナ禍では満足な活動をするのができず、練習や練習試合ができなかったことに苦勞したと先輩方がおっしゃっていました。当時は部員が集まって練習ができなかったため、Zoomで体幹トレーニングを行ったり、トレーニングを記録するアプリを使用し、各々が筋トレやランニングの記録をとって部内で共有したそうです。このように、離れ離れにならなければいけない時期でもチームが繋がりや部員たちの居場所になっていたことが、先輩たちから受け継がれ、現在の私たちの強みでもあるチームとしてのまとまりがあるのだと思います。

OBOGの皆さまには、日頃からFacebookの投稿やInstagramの試合配信などを通して、実際に試合会場まで足を運んで応援してくださりありがとうございます。皆さまの温かい応援が部員全員を勇気付けてくださいました。また、金銭的なサポートもしていただき、今私たちが活動できているのもOBOGの皆さまの支えがあったことです。コロナ禍の影響で、ここ数年間現役とOBOG会の皆さんが集まる場が少なくなっていました。今後は以前のようにOBOG会の皆様と積極的に交流する場を増やしていきたいと思っています。今後とも応援よろしくお願いします。

【設立年】
1953年（71年目）
【現在の在籍人数】
約30名
【活動日】
週5-6日
【活動場所】
ICUグラウンド
【直近のイベントや試合等】
4月から新リーグが開催されます。ぜひ応援にいらしてください。
【SNS】
Facebook: @icufcfootballclub
X(Twitter): @ICUFC
Instagram: @icufc_official



左から／試合前の円陣／2023 年 11 月／東京工業大学戦での得点シーン

From now on, we will be introducing ICU’s extracurricular activities which include student groups and clubs. Many of the student groups, established when ICU first opened its doors to students and also while you were students at the university, still continue to be active today. Not just limited to academic studies, ICU’s appeal also extends to its extracurricular activities. Please take a look at the active participation of students in their extracurricular activities.

Text provided by each group and club

ICU Modern Music Society

ICU Modern Music Society, commonly known as MMS (Mumus), is a big band which mainly performs swing jazz and combo jazz, and it was established by the late Masamitsu Yamano (one of the first ICU graduates and the third president of Yamano Music Co., Ltd.) with other fellow members when ICU first opened its doors to students. (It was called the Jazz Men’s Club at the time of its founding.) Since its establishment during the dawn of Japanese jazz in the 1950’s, MMS has continuously held over 60 regular concerts, and has a particularly long history among the numerous existing student big bands. MMS celebrated its 70th anniversary in 2023! Prior to the COVID-19 pandemic, MMS actively took part in events such as participating in the Yamano Big Band Jazz Concert, holding joint concerts with other universities, and going on a tour to America. However, with its activities limited during the pandemic, the number of active members decreased drastically, and MMS was unable to perform as an ensemble or hold activities. Despite this situation, MMS invited additional players from other universities, and from 2022, foreign exchange students and September students also entered the club. As a result, since last September onwards, MMS has performed at the ICU Festival, and also held three other concerts. From the beginning of this academic year, MMS has deepened its ties with other student groups within the university, and continuing on from last year, participated in the ICU Festival again, as well as holding a joint event with ICU’s Spanish Speaking Society. MMS is currently practicing hard in order to participate in the Yamano Big Band Jazz Concert! Although MMS faced numerous difficulties during the past few years with limitations on its activities during the COVID-19 pandemic and also being unable to perform freely, it has steadily extended its activities as a result of the originality, pleasant personalities, and unity of its members. ICU students come from various cul-

tural backgrounds and the same can be said about their background in music. Some MMS members frequently listen to J-pop, others dedicated their middle and high school years to performing in a big band, or grew up listening to church music. This diversity means that members differ in their area of focus, and it is therefore necessary to establish a common understanding when performing the genre of swing jazz. Difficulties often occur, but the differing music background of the members can also provide new perspectives and solutions, and this element is what makes working together with diverse members so enjoyable, and is also an important contributing factor to MMS’s appeal. With its establishment 70 years ago, MMS’s long history provides the opportunity for current student members to keep in contact with the club’s alumni. The club’s recent alumni, particularly those in ID 18, attend our practice sessions and provide lessons which have greatly encouraged the current members. Moreover, current student members have been invited to big bands organized by the club’s alumni which have provided an extremely valuable experience. MMS activities are able to continue through the support from the club’s alumni who also provide us with individual lessons. The MMS Facebook, which was suspended during the COVID-19 pandemic, has also recommenced and is being updated from this year, and we hope to receive your continuing support!

[Year of Establishment]
1953 (71st Anniversary)
[Number of Current Members]
Approximately 30 members
[Activity Days]
Three days per week: Mondays, Wednesdays, Fridays (Changes may occur depending on the trimester)
[Activity Location]
Diffendorfer Memorial Hall, West Wing Basement Music Practice Room
[Upcoming Events or Competitions]
MMS is planning to hold a recital in the university campus at the end of April. We hope to revive the tradition of holding recitals which was sus-

pended before the COVID-19 pandemic.
[Social Media and Contact Address]
Facebook:@icumms
X(Twitter):@mmsicu
Instagram:@mms.icu
Gmail:mmsicu@gmail.com

ICUFC (Football)

ICU’s male football club (ICUFC) was established in 1953, and it currently has approximately 30 members, mainly from ID 26 and 27, as well as a head manager and coach. The club belongs to the Kanto University Football League, Tokyo/Kanagawa Second Division since two seasons ago, and the team is currently training daily with the aim of moving up next season into the First Division. Last season, the members aimed to overturn everyone’s predictions in a good way. ICUFC’s members are not all from high schools with a strong football team, and its members come from various backgrounds. Some members did not even belong to a football team in their high schools. The fact that a team such as ours currently belongs to the Kanto University Football League Tokyo/Kanagawa Second Division and has won matches against stronger teams, provides meaning to our club activities. The happiest and most enjoyable moment in our club activity was when these matches marked a victory for ICUFC with such fervor that we witnessed the fruition of our daily practices. We continue practicing daily without any compromises in our pursuit of that very moment. Moreover, the members are all close to each other, and everyone gives their best on the field, and outside the field, we all talk to each other as equals, irrespective of age, and the team maintains a good balance. This element is not only evident among the players, but the same can be said regarding the head manager, coach and team assistants. I believe that the team’s appeal can be found in its unity. Members in ID 26, the year the current executive members of our club are in, and later, did not experience

what club activities were like during the COVID-19 pandemic, but the seniors have talked about the difficulties which they faced when they were unable to carry out practices or hold practice matches. At the time, as members were unable to meet and hold practices, they carried out body core training exercises on Zoom, and each member used an app to record their muscle training and running exercises which were subsequently shared with the other club members. I believe that the team’s unity and the sense of belonging among its members even during a period when they were forced to remain apart has been passed on to us from our seniors, and is reflected in our strength as a unified team. We remain in contact with the club’s alumni on a regular basis through Facebook posts and by streaming our matches on Instagram, and we would like to thank you for actually coming to our matches and supporting us. Your warm support has given us courage. Moreover, we are grateful for the financial support which we have received from you, and it is your support that enables us to continue with our club activities. The COVID-19 pandemic prevented the current members and the club’s alumni from getting together often in the past several years, but in the future, I hope that we will be able to increase opportunities for interaction, as in previous times. We look forward to your continuing support.

[Year of Establishment]
1953 (71st Anniversary)
[Number of Current Members]
Approximately 30 members
[Activity Days]
Five to six days per week
[Activity Location]
ICU field
[Upcoming Events or Competitions]
The new League season begins in April.
Please come and support us.
[Social Media and Contact Address]
Facebook:@icufcfootballclub
X(Twitter):@ICUFC
Instagram:@icufc_official



photo Mari Matsushima

From the Alumni House

アラムナイハウスから

北海道支部 懇親会開催報告

文：我孫子洋昌 (39 ID95)

11月5日、ICU同窓会北海道支部の懇親会を開催することができました。道内の美味しい店をたくさんご存知の齋藤龍さんオススの中国料理店、養源郷で開催することができました。

幅広い世代の卒業生、元ICU教会牧師のゲッツ先生、ICUからも富岡理事と小瀧さんを合わせて総勢27人が集いました。

ICU同窓会北海道支部の懇親会が開催できない間に逝去された、山田純さん、鎌島先生、永田先生もきっと、懇親会の様子を見守りながら一緒に楽しんでくださっていると開会あいさつで申し上げ、3期生鈴木良一さんの乾杯で開会しました。

富岡理事と小瀧さんからICUの近況(新しい施設や奨学金制度など)についてお話を伺った後、北海道支部同窓会といえば定番の自己紹介&近況報告が約1時間ありました。

「ICUもいいけど、勤務先の大学もおススメです」という話や、「大学院の間だけ北海道で…と思ったら30年過ぎました」という話、ご夫婦でのスピーチはまるで夫婦漫才…などなど、それぞれのICUとの出会いや現在の暮らしの様子、仕事の話など盛りだくさんの内容で、(案の定) 予定時間をオーバーすることになりました。

今回出席が叶わなかった皆様も、次回はお参加いただき、道内の色々なところで暮らしている卒業生同士で交流を深める機会になればなあと考えています。



テニス部OBOG会開催報告

文：田中ゆかり (27 ID83)

2023年11月26日(日) 12:00-14:00、ICU大学食堂にて、第4回ICUテニス部OBOG会を開催いたしました。前回の2019年11月から4年ぶりとなります。

前日までの温暖な陽気から一転、冬日となったICUキャンパスですが、朝からの小雨にかかわらず、OBOG66名、現役14名の総勢80名が参加しました。久しぶりにリアルで談笑できるだけでなく、卒業年度1961(5期) から、卒業予定年度2027までが一堂に会する、半世紀以上の世代を超えた同窓会となりました。

会は、OBOG代表挨拶、竹内理事長のビデオメッセージ、同窓会支部報告、現役の活動報告、現行・次期幹事紹介と、とどこおりなく進行し、懐かしい面々との歓談、初めて会う現役生との交流であっという間に時間は過ぎ、次回開催時の再会を願って閉会となりました。終了時には雨も上がり、現役案内役によるキャンパスツアーを予定通り催行することができました。多くのOBOGが懐かしいテニスコートはもちろん、新築あるいはリノベされた施設設備を感慨深く見学されていました。

この場を借りて、設営から撤収まで多大なご協力をいただいた現役の皆さんと、準備にご協力くださった大学総務並びに同窓会事務局に改めてお礼を申し上げます。



関西支部会開催報告

文：高畑かおる (27 ID83)

2023年11月26日(日) に久々の関西支部会が開催されました。会場のベトナム料理リヴ・ゴーシュが入る芝川ビルは昭和2年に建てられた有形文化財で、お料理はベトナム料理のbuffetでした。

支部長の近藤尚孝さん(22 ID78) のご挨拶に始まり、荻原哲先生(17 ID73) のご講演の後、自由な歓談という形で行われました。総勢33人、2期(ID58) から47期(ID03) までの幅広い年齢層の会員の方のご参加で、関西らしい賑やかな会となりました。また、ICU常務理事の富岡徹郎様、同窓会組織部担当役員の武藤小枝里様にもご参加いただきまし

た。

荻原先生のご講演(下記参照) はご自身のヒストリーを語られる中で聴き手にも問いかける形で行われました。懇談会の中での何名かの方のスピーチでも荻原先生のテーマを受け取ったメッセージがあり、ICU同窓という共通のバックグラウンドを持つ参加者の間で親密な交流ができたと思います。

〈ご講演〉

「サイエンスとミュージック：ICU 50年の宿題」

荻原 哲 (Satoshi Ogihara, Ph.D.) (17 ID73)

理学博士、大阪大学名誉教授 (Professor Emeritus Osaka University)、ワンコイン市民コンサート実行委員会事務局代表 (Executive Director, OCCA/One-Coin Concert for ALL)



香川支部会 開催報告

文：浜崎直哉 (37 ID93)

2023年12月2日(土) 17時より高松市内の「nagara」にて、2019年以來の香川支部2023年の会を開催しました。

5期から65期までの、香川支部に登録いただいている卒業生11人と、(藤村美幸さん(59 ID15) 望月悠伍さん(65 ID21) が初参加)、徳島支部から木村支部長ともう1人参加され、総勢13人での会となりました

冒頭に浜崎支部長(37 ID93) より、香川支部のあゆみをお話し、その後末吉会長(16 ID72) による乾杯の発声で和やかに会はスタートしました。

2019年以來の全体会でしたが、顔ぶれに若い世代が増え、にぎやかな楽しい会合となりました。

コロナ状況の中でも、香川支部のメンバーは順調に増え、岡山県からも参加される方が出てきており、50人を

超える卒業生と繋がりができています。(名誉会員、平田オリザ氏・県外会員含む) 今回は高知県から初参加もありましたので、高知県でも卒業生の繋がりを作っていきたいと考えています。



同窓会グッズ新製品 「ティータイムトレイ」 販売開始!

文：岩田岳久 (21 ID77)

桜グッズに新たにティータイムトレイが加わりました。

表面に桜の木目が自然に流れるように走り、ゆったりとティータイムを楽しめます。

今回の桜の木は2020年に伐採し、製材、乾燥を経て、写真のICUキャンパス内の倉庫に保管してあったものを使用しました。

価格は2000円です。ご購入ご希望の方は、同窓会事務局 (aaoffice@icualumni.com) までご連絡ください。

来年2月にはまた朽ちそうな桜の木を何本か切るとしますので、何か新たな桜グッズ制作のアイデアがありましたら同窓会事務局までお知らせください。



寄付者御芳名 Donors

田辺美智子 (11)
齋藤顕一 (17)
貴重なご寄付を賜り、誠にありがとうございます。
います。

たずね人 Missing

池田英人 (35 ID91)
深見淳 (43 ID99)
田中智己 (49 ID05)
小山英恵 (55 ID11)
市村脩一郎 (57 ID13)
野邊大樹 (61 ID17)
鳴島歳紀 (63 ID19)
動静をご存知の方は事務局までご一報ください。

訃報 Obituary

横溝利男 (GE62)
吉瀬宣男 (3)
小島 (旧姓：小松沢) 京子 (3)
ラディール (旧姓：山口) 文子 (4)
木島達彦 (5)
並木政和 (5)
佐藤修二 (5)
平野次郎 (7)
寺尾 正英 (10)
星 (旧姓：俵) 素子 (11)
蜂須賀 (旧姓：志賀) 昌子 (22)
心よりお悔やみ申し上げます。

事務局からのお知らせ

★ 広告募集！

本誌では広告を募集しています。
フルサイズ6万円、ハーフサイズ
3万円で承っております。ご興味
のある方は、詳細を事務局までお
問合せください

★ 原稿をお寄せください！

期会、リユニオンなどの案内・報
告をお寄せください。本誌および
Web サイトに掲載いたします。

★ 住所変更について

住所・勤務先・氏名の変更の際は
メールまたは同窓会のWebサイト
の住所変更から、ご一報ください。
aaoffice@icualumni.com
携帯の方はこちらからどうぞ：



地方・海外にご転勤の際には支部
をご紹介します。同窓会事務
局までお問合せください。

★ ご協力をお願いします

大学の宣伝＝大学への支援という
考え方から、同窓生の著作、雑誌
インタビューなどには、略歴欄に
「国際基督教大学卒業」とお入れ
いただけますよう、お願い申し上
げます。

アラムナイニュース電子版のお申込み
同窓会メールマガジン配信先のご登録

- 1) アラムナイニュースの電子版配信をご希望の方は、下記フォームからご登録をお願いいたしま
す。ご登録いただきますと、郵送でのお届けは行わずにメールで電子版をご案内いたします。
- 2) 2023年1月から、ICU同窓会員向けにメールマガジンによる情報発信を始めました。メールマ
ガジンが届いていない方は、メールアドレスのご登録がないか、古いアドレスが登録されている可
能性があります。ぜひこの機会に、下記フォームから最新のメールアドレスの
ご登録をお願いいたします。
登録はこちらのフォームからお願いします。(住所変更と共通のフォームです)
https://www.icualumni.com/to_alumni/register/



DAY賞候補者をご推薦ください

Distinguished Alumni of the Year (DAY) 賞は、国際基督教大学に在籍したことのある方 (卒
業生・留学生・教職員。ただし故人は対象外) の中から、大学および同窓会の知名度・魅力度
を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるために贈呈されます。皆様からのご推薦をお
待ち申し上げております。

- ※ 自薦・他薦を問いません。
- ※ 推薦は年間を通して受け付け、毎年10月15日受け付け分までを選考対象として翌3月の
桜祭りで受賞者を表彰します。
- ※ 受賞者は同窓会ウェブサイトおよびアラムナイニュースで発表されます。
- ※ 推薦および選考の過程については公開されません。
- ※ 歴代の受賞者は、ウェブサイトをご覧ください。

推薦方法 いずれかの方法でご推薦ください

- 1) 同窓会ウェブサイト「DAY賞」のページ [推薦フォーム] をご利用ください。
<https://www.icualumni.com/activities/day/>
- 2) 同ページより [推薦用紙PDF] をダウンロードし、
必要事項をご記入の上ICU同窓会事務局あてに郵送またはFAXでお送りください。
- 3) メールに以下の必要事項を記載してICU同窓会事務局宛にお送りください。
①推薦したい方の氏名
②推薦したい方の卒業年あるいは在籍年 (分かる範囲で)
③推薦理由：新聞記事などの客観的資料があればあわせてお送りください。
④あなた (推薦者) の氏名、卒業年または学生ID、住所、電話番号、メールアドレス

ICU同窓会事務局 〒181-8585東京都三鷹市大沢3-10-2
TEL&FAX：0422-33-3320 E-mail：aaoffice@icualumni.com



あなたのご意思の実現に向けて、サポートいたします。

三井住友信託銀行の遺言信託

三井住友信託銀行の遺言信託では、皆さまの財産に関するご意思を反映する遺言書作成の
ご相談や、遺言書の保管※・遺言の執行などを一貫してお引き受けいたします。
まずは財務コンサルタントまでご相談ください。

※自筆証書遺言を作成する場合、自筆証書遺言書保管制度を利用し、遺言書は法務局にて保管します。

【遺言信託 (執行コース) 手数料等について (消費税等込み)】 (2023年12月1日現在)

〈お申込時〉基本手数料：330,000円 別途、公正証書作成費用、戸籍謄本などの取り寄せに関する費用等が必要になります。
〈遺言書保管中〉遺言書保管料：毎年6,600円 〈遺言執行時〉遺言執行報酬：当社所定の報酬を申し受けます (最低報酬額：1,100,000円)。
上記はお支払プランの一例です。他のお支払プランもあります。詳しくは、窓口までお問い合わせください。※契約締結後に、解約、公正証書
正本の保管辞退、遺言執行者への就任の辞退、遺言執行者の辞任等が生じた場合であっても、基本手数料はご返金いたしません。

◎国際基督教大学と当社は「遺贈による寄付制度」の提携をしています。

この制度により遺贈をされる場合は基本手数料が5万円割引となります。ご相談の際にお申し出ください。

資料のご請求は以下までお問い合わせください。 ※資料請求以外の内容については、店舗や専門部署へお取次いたします。

0120-977-641

受付時間

平日9:00～17:00 (土・日・祝日および
12/31～1/3はご利用いただけません)

三井住友信託 遺言信託

検索



三井住友信託銀行

成長できない日本に必要な問題解決力を 身につけて自分の価値を高めませんか？

フォアサイト・アンド・カンパニー代表取締役

齋藤 顕一 Saito Kenichi (ID73、元ICU同窓会会長)

問題解決力講座、受講生募集！

元マッキンゼーパートナー、長年のコンサルティング活動を元に問題解決プログラムを作成し、
進化させ続けている。企業研修、大学・大学院、問題解決塾生を含めすでに2万人以上を指導。
企業業績向上のための問題解決力をわかりやすく解説し、演習で実践までサポート。
著書に「問題解決の実学」、「はじめての問題解決カトレーニング」(ダイヤモンド社) などがある。

フォアサイトのeラーニング

【問題解決力育成10時間講座 (英語版もあり)】 【決定版問題解決力育成講座】
【コンサルタント育成プログラム】 【特別講座 質問力と対話力】

齋藤顕一主催問題解決塾

全48時間、対話形式で個人の演習とフィードバックも行い、仕事の実践をサポート

ICU同窓生及び学生にeラーニング/ 問題解決塾受講費用を20%割引

フォアサイト・アンド・カンパニー公式HP

ICU生限定20%OFFコード

【ICU24】

※2024年6月30日まで有効



3月30日
on Saturday

2024年3月30日開催 桜祭りのお知らせ

(※) DAY賞 (Distinguished Alumni of the Year Award) は、ICUに在籍したことのある方(卒業生・留学生・旧教職員を含む)の中から、大学および同窓会の知名度・魅力を高めることに貢献した方に対し、その功績を称えるため毎年授与されるもので、今年は3人の卒業生に授与されることになりました。

今年第19回を数える同窓会「桜祭り」は、同窓会年次総会、DAY賞(※)表彰式、卒業50周年記念式典など、年に一度の総合イベントです。
卒業50周年記念式典では18期生をお迎えします。コロナ禍による行動制限があちこちで解かれ、昨年に引き続き、皆様が対面で集う会を催す運びとなりました。同窓会役員・スタッフ一同その喜びを皆様と分かち合うことを楽しみにしておりますので、是非ともご参集くださいますようお願い申し上げます。

開催日：2024年3月30日(土) 開場12:30 開始13:00

●同窓会総会、DAY 賞表彰式、卒業50周年記念式典 大学礼拝堂にて

●懇親会(茶会) 大学食堂にて 大学礼拝堂の式典に引き続き開催15:00頃を予定

懇親会参加費：卒業生／成人2000円、ICU 在学生：1000円、同伴中高大学生：1000円、小学生以下：無料

※18期生ならびに2023年夏季及び2024年春季ご卒業の皆様は「無料ご招待」とさせていただきます。

総会の様子は同時配信されます。映像は一方通行で視聴のみになりますので、会場に来られないが総会の議決への参加をご希望の方は参加申し込みフォームより委任状をご提出下さい。

お願い：総会への出欠の如何に関わらず、出欠のご連絡をお願い申し上げます。

ご出欠(現地参加および配信視聴)は右の参加申し込みフォームからお知らせください。—————→

締切:3月15日(金)

※卒業50周年の18期生の皆様は別途お送りするご案内状からご連絡ください。

※社会情勢の変化などにより、プログラムに変更が生じる可能性があります。

詳細につきましては、同窓会 Web サイト <https://www.icualumni.com/> でご確認ください。—————→



メールまたは郵送での出欠連絡の場合は以下の項目を明記してください。

*出席者氏名と Name (in alphabet) (必須)

*期 / 卒業年 / ID 最初の2桁 (必須)

*卒業時の姓(現在と異なる場合)

*連絡先 (必須)

*総会への出欠 (必須)

*懇親会への出欠 (必須)

*懇親会への同伴者：同窓会員の場合：氏名、期 / 卒業年 / ID 最初の2桁

成人(同窓会員を除く)：人数 学生 / 未成年：人数

*総会で議決権を他の会員に委任する場合、委任する会員氏名(空欄時は議長に一任いたします)

<出欠連絡・お問合せ>

I C U 同窓会事務局 aaoffice@icualumni.com

TEL&FAX 0422-33-3320 (平日10:00～12:00、13:00～17:00)

Sakura Matsuri on March 30, 2024

This Alumni Association's "Sakura Festival" is a comprehensive annual event, comprising the General Assembly, the Distinguished Alumni of the Year Awards, and a semicentennial celebration of graduation, which the class of 1974 is invited this year. All association officials and staff hope that many ICU alumni will return to the campus to enjoy the beautiful campus and renew old friendships.

Date & Time: March 30, 2024 (Sat) from 13:00 (Doors open at 12:30)

●General Assembly, DAY Award ceremony, Semicentennial ceremony at University Chapel

●Tea Party: at University Dining Hall, from 15:00 after the ceremonies at the chapel

Fee for tea party: graduate/adult: JPY2,000, university/high school student: JPY1,000, elementary school student/preschooler: free of charge

※The class of 1974 as well as graduates of Summer 2023 and Spring 2024 are free of charge.

The General Assembly will be live-streamed. The streaming is one way and viewers are not able to vote in polls.

Those who would like to make a vote should submit a proxy in advance. (See the attendance form.) —————→



Please submit the attendance form below.

Due: March 15 (Fri)

※If you are one of the class of 1974, please use another form on the invitation sent to you.

※Please check the Alumni Association website for any change and details. —————→



Contact:

ICU Alumni Association Office aaoffice@icualumni.com

TEL&FAX 0422-33-3320 (Weekdays10:00～12:00, 13:00～17:00)

DAY賞（Distinguished Alumni of the Year Award）2024受賞者決定！



吉川元偉

YOSHIKAWA, Motohide (18 ID74)
社会科学科卒

元外交官。ICUでは「外交官になって平和に貢献したい」との強い思いから、国際法を勉強し、1974年に外務省に入省。スペイン留学ののち、アルゼンチン、英国、フランス、タイ、米国等での勤務を経て2006年にスペイン大使に就任。その後も初代アフガニスタン・パキスタン支援担当大使、経済協力開発機構（OECD）代表部大使、国連大使・常駐代表などの要職を務めたのち、2016年に外務省を退官。翌年からは、ICUの特別招聘教授を務めつつ、外交官や国際公務員を目指す学生育成に努力している。スペイン、アルゼンチン、モロッコ、モンゴルより叙勲され、英語の他、スペイン語、フランス語も堪能。

Professor Yoshikawa is an ex-diplomat. With a strong desire to become a diplomat and contribute to the peace, he studied International Law at ICU and joined the Ministry of Foreign Affairs in 1974. After having studied Spanish in Spain and worked in Argentina, the UK, France, Thailand, the US, he was appointed as Ambassador to Spain in 2006. Later, he held various important ambassadorship such as the first Special Representative for Afghanistan and Pakistan, Ambassador to the Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) in Paris, and Ambassador・Permanent Representative to the United Nations in 2013. After retiring from the Ministry of Foreign Affairs in 2016, he has been serving as Distinguished Professor at ICU from 2017. At ICU, he has been helping those students who aim for careers as diplomats or international civil servants. He received decorations from Spain, Argentina, Morocco, and Mongolia. He is fluent in English, Spanish and French.



八田陽子

HATTA, Yoko (19 ID75)
語学科卒

味の素株式会社、広栄化学株式会社、および日本製紙株式会社社外取締役。小林製薬株式会社社外監査役。ICUでは語学を専攻。卒業後子育てをしながら米国公認会計士の資格を取得し1988年に、Peat Marwick Main & Co. (現 KPMG LLP NY) に入社。主に日本企業の米国子会社向けに「米国の税務」サポートを行った。2002年に帰国後は、ピートマーウィック税理士法人（現KPMG税理士法人）のパートナーとして主に価格移転問題を担当した。NY在住時はICU同窓会北米部支部長。昨年5月までICU（大学の）監事を15年間務めた後、現在も大学評議員を務めるなど母校への直接的貢献を続けている。

Independent Outside Director for Ajinomoto Co., Inc., Koei Chemical Co., Ltd., Nippon Paper Industries Co., Ltd., Outside Audit and Supervisory Board Member of Kobayashi Pharmaceutical Co., Ltd. At ICU, she majored in Language. After graduating and spending time as a family person, she joined KPMG LLP in New York in 1988 where she provided tax services mainly for US based subsidiaries of Japanese firms. When she returned as a partner of KPMG Japan, she mainly supported tax issues in the transfer pricing area. She Contributed to ICU as Chairperson of ICU Alumni Association in the Americas during her stay in NY. She served as Auditor of ICU for 15 years until May this year. She is continuing serving as a Councilor of ICU.



ウィリアムズ（半田）郁子

WILLIAMS (HANDA), Ikuko
(26 ID83) 語学科卒

ICU卒業後、1989年に渡英。リーズに30年居住。2008年に日本人女性として初の英国国教会司祭となり、その後リーズ大学病院でチャプレンを務める。第二次世界大戦の日本軍捕虜収容所で過酷な体験をした元戦争捕虜の英国人との出会いを通じ、戦争の負の歴史に向き合い人と人が和解することの大切さを身をもって示してきた。2019年帰国後、キリスト教教派間の対話、夫である現ICU副学長マーク・ウィリアムズ氏が推進する日韓学生の交流プロジェクト、ICUの学生・教職員と続けてきた読書会、ICU和解フォーラムと呼んで開催する講演会や夏トリートなどに携わり、一貫して「和解」を課題とした活動を展開。またICU内の自宅や、教員と卒業生と組んで毎月開く「てばなすぺーす」と呼ぶオンラインの集まりにて、ICUの伝統でもある学生との対話を続け、多くの学生に寄り合い続けている。

Revd Ikuko Williams lived in Leeds, UK for 30 years from 1989. In 2008, she was ordained as a priest for in the Church of England, as the first Japanese woman to do so, and later served as a health care chaplain at the University Hospitals of Leeds. Through encounters with former prisoners of war, who were living with trauma-turned-anger from their experiences in Japanese prisoner of war camps during World War II in Southeast Asia, and through the unexpected experience of reconciliation with them, she has been advocating the importance of reconciliation between individuals living with the negative history of war. Since returning to Japan in 2019, she has consistently promoted activities to encourage discussion on the theme of “reconciliation,” such as organizing various book groups, speaker-events and summer retreats under the name of the “ICU Reconciliation Forum”, contributing to an exchange project between Japanese and Korean students organized by her husband, current ICU Vice President Mark Williams, and practicing ecumenical Christian ministry. In addition, she continues to offer a listening presence and spiritual support for students, at her home in ICU, which is part of ICU’s tradition, and through ‘Tebanaspace’, a monthly online listening space which she co-runs with a member of faculty and a graduate.

STAFF

STAFFEDITOR IN CHIEF

新村敏雄 SHINMURA, Toshio (27 ID83)
MANAGING EDITOR
松田真理子 MATSUDA, Mariko (38 ID94)
EDITORS
長谷川由紀 HASEGAWA, Yuki (32 ID88)
太田順子 OOTA, Junko (35 ID91)
谷澤 聡 TANIZAWA, Satoshi (54 ID10)
亀山詩乃 KAMEYAMA, Shino (54 ID10)
川島美菜 KAWASHIMA, Mina (58 ID14)
滝沢貴大 TAKIZAWA, Takahiro (62 ID18)

PHOTOGRAPHER

松島真理 MATSUSHIMA, Mari (36 ID92)
ART DIRECTOR
佐野久美子 SANO, Kumiko (44 ID00)
PRINTING DIRECTOR
坂井 健 SAKAI, Takeshi (小宮山印刷)
SECRETARY GENERAL
池島広子 IKESHIMA, Hiroko (27 ID83)

PUBLISHER

廣岡敏行 HIROOKA, Toshiyuki (31 ID87)

cover photo: 第二男子寮OB会

backcover photo: 岸 佑

ご意見・ご感想をお気軽に

アラムナイニュースは、同窓生のみなさまのために制作しているものです。今後の制作の参考にしますので、ご意見・ご感想、企画や人物の紹介等がある方は、メールにてお気軽に事務局までお知らせください。

アラムナイニュース編集部員募集

あなたの経験をANに生かしてみませんか？企画、取材、執筆、撮影、編集進行等と一緒にやって頂ける方を大募集中です。もちろん未経験でも可。最初は一緒に取材などを行いながら編集のプロから直接技術を学べますし、3年ぐらいいれば、一通り編集の基本が身に付きます。もちろん、現役の学生さんも大歓迎です。興味のある方は、同窓会事務局へメールでご連絡ください。

■大学・同窓会に関する情報が満載です。

ぜひ一度ご覧ください。

同窓会Webサイト

<https://www.icualumni.com/>

同窓会 Facebook

<https://www.facebook.com/icualumniassociation>

X (旧 Twitter) @icualumni

大学 Web サイト <https://www.icu.ac.jp/>

JICUFWeb サイト <https://www.jicuf.org/>

■ ICU 同窓会事務局

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

TEL&FAX : 0422-33-3320

Email : aaoffice@icualumni.com

